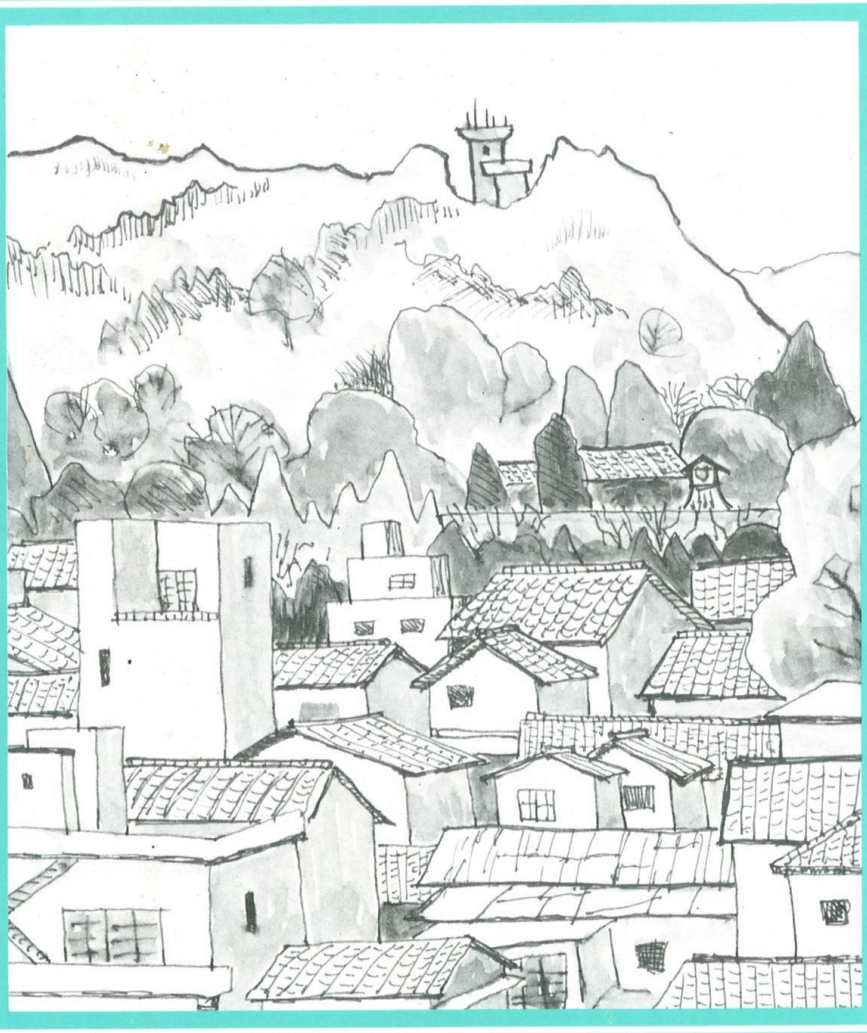
# やまさき文化

'89-2＊No.8



山崎町文化連盟

# 〝やまさき文化〟第八号発刊に際して

山崎文化連盟会長　壺　阪　　寿

やまさき文化もいよいよ内容が充実してまいりました。そしてそれと同時に山崎町の各方面の文化活動も大変活発になってきました。やはりこれからは、地域特性を活してゆく時代となったのですが、その基盤にはしっかりとした文化性というものが一層必要なのではないかと考えます。

さて最近はそれぞれの地方或は都市で色々なイベントが催されています。まさにイベント時代と申しても過言ではない程です。然したくさんの中には大変成功したものもあれば、そうでないものもあるようですが、ともかくも色々な催し物がされる時代であることにはまちがいありません。

その一番の目的としているところは、やはりその地方を、そして都市を何かの型でアピールしたいということに外ならないと思います。

私も昨年この様なイベントを二・三見ましたが、中には余り感心させられないのもありました。その余り感心しなかった催し物が、何故そうなったのだろうかと考えました時に、それはその地方の或はその都市の持っている、文化性の高低にあるのではないかと思えました。

私等は、毎日々別に文化性を高めようと考え乍ら、日常生活を送っているのではありませんが、その町の持っている〝ふんいき〟の様なものが知らず知らずの内に出来それが一つの町の文化性格のようなのを作っていくのだとすれば、それを構成している一人一人の考え方というものが、非常に大事なことになってまいります。

その様な観点から今後もこの小冊子〝やまさき文化〟が町民の皆様方に少しでもお役に立つことを願って止みません。

なお末筆になりましたが〝やまさき文化〟創刊以来編集長として、大変御盡力いたゞき、そして又山崎の文化発展にも大変貢献されました根岸元彦氏が昨年夏の終り頃に他界された事はまことに残念なことでありました。誌上をお借りして、改めて御冥福をお祈り申し上げます。

S64

## ◇目　次◇


〝やまさき文化〟八号発刊に際して　壺阪　壽　2
新蔵公路を行く　安井　道夫　3
ふるさとかるたを発行　和田　秀男　12
私のふる里頌　松井　叔生　13
嘘　北岡　修　13
短歌　歌集「対偶」に寄せて　稲村　幸子　14
新樹第二集　藤原　すみ　14
短歌ひとすじに　栗山　節子　15
俳句　城下町いずしを尋ねて　芦田　八重　17
こぶしの里を訪ねて　小紫　いく　17
山崎薪能　江崎金治郎　19
ミニ・エッセー　藤村　清一　19
宍澤御陣屋掘之内絵図看板の建設　郷土研史跡部　20
縁あって　塚田　清一　20
漢詩と日本人の心　小川　登　21
文化会館のピアノを弾いて　町悦子　21
さつき雑感　立花正太郎　22
茶華道の歩み　北川　智恵　22
層の厚い山崎囲碁界　高野　圭介　23
さつき民踊グループ　大谷つるゑ　24
現代の世相について　神山　宗明　24
ハーモニー雑感　藤井　七代　25
九月の観察日誌から　古池　末之　25
古典に思う　福山　清一　26
健康の本質　澤田　友榮　26
根岸さん追悼　安井　道夫　27
昭和63年度子ども俳句大会　入賞者一覧　27
編集後記　荒木　俊介　28
表紙画／藤原義弘
表紙題字／尾崎正一　カット／藤原義弘

# 新蔵公路を行く

## カイラス山巡礼行より

安井道夫

**一九八八年八月十一日　北京ーウルムチ**

飛行機が高度を下げ、ウルムチ市に向かって着地体勢に入った途端ボコダ山が美しい全景をみせはじめた。標高五四四五メートルでそれほどの高山ではないが、天山山脈東段の最高峰で砂漠地形のなかに屹立し、頂部はある程度の幅をもって山脈状をなし、それが真っ白に雪に蔽われているのである。崇高な感じさえする。

飛行場には祁偉さんという女性が迎えに来てくれていた。父は漢族、母はシボ族だという。シボ族というのは錫伯と書き、満州族の一支族で、十八世紀清朝の新彊征討軍の屯田兵としてイリ地方に定住したものの子孫で、いまでも固有の満州語を話すという。

ホテルへ行くまでのバスの中で彼女の話を聞く。ウルムチ市は新彊ウイグル自治区の中心都市で人口一二〇万人、標高九〇〇メートル。近郊では綿の栽培が盛んである。

一瞬、ポコダがバスの行く手に見える。最近彼女は山頂まで登ってきたという。

夕食後、十時すぎ、といってもこの広い中国全土が北京並みのサマータイムを採用しているので、日本時間そのままの時計でいいのだが、時差の関係でなんだか不思議な時間帯にいるような気がする。

まだ外は薄暮。暮れにくい夏の宵である。カメラを持たず、同室の蜷川さんと街に出る。

洋服を着ているが、一目で非常な疲れが見てとれる男。その男はゆっくりゆっくり歩いていたが、突然建物の工事現場へ入って行く。監督らしい男と二こと三こと言葉をかわし、持っていた鞄を側におき出っぱなしの水道の水をこころゆくまで飲んでいる様子。彼等がどんな遣り取りをしたものか分からない。知合いの様子もない。職にあぶれた男なのだろうか、とも考えてみる。

道端のあちこちでは、西瓜やハミ瓜を売っている。映画館の前へさしかかると祭のような雑踏。正面にはインド映画と並んで、日本映画の『敦煌』がはやくも上映されている様子。大きな看板がある。その前の広場に三列ほどの仕切りができて、シシカバブなど焼肉ばかりの店が並ぶ。匂いと坐って食べている連中のさんざめきと行き交うひとびとの足取りのそのゆっくりしたリズム。なんだか羨ましくなるほどの豊かさ。生活のゆとりというものを感じてしまう。

そのひとびとの喧噪に溶け込むように、ひとびとと同じ速度で歩いてみる。あちこちから肉を焼く男たちの声がかかる。いま食事したばかりでなかったらと残念。

羊の臓物ばかりの店、どうするのか羊の頭ばかりをならべている店。若い女ひとりが串をほおばっているもの、家族だんらんといった子供連れの姿もみえる。

お茶の入ったコップを並べ、それにガラス板で蓋をして売っているだけの店。何一つ食べなくても、その雰囲気に満腹して、帰りにハミ瓜二つを一元で買った。

**八月十二日　ウルムチーカシュガル**

遅い朝食。午前まず区博物館へ行く。何よりも三元払って最後に入ったミイラの室の異様さ。ありあまるほどのミイラが、大した設備もない単なるガラスケースに入り、あまりにも無造作に陳列されているように見える。夫婦らしい男女の二体、また子供のものなど。

たとえ埋葬の時点が紀元前一二〇〇年頃の古いものだとしても、まだ黒髪は抜け落ちもせず、ただ局部に布片がかけられただけで、不特定のひとの目に曝されているのである。

それでも耳を澄ますように、大きな呼吸でもすればやはり死臭は感じてしまう。次々発掘され、各地の博物館へ移されたもののうちには、上海でのようにもう殆ど変色してしまって、発掘当時のおもかげのないものも多いという。

同行者のひとりが言った。こういうふうに、死んで何千年もたってからも、その姿かたちが残るというのはなかなか幸せなことではないか、と。私はそんな意見のあるのに驚いてしまう。

生前どのような生活をしたひとたちであるか詳らかに知る由がないとしても、ここに曝されているのはこのひと達の生前の面影ではない。

ただただ生きている側の勝手な恐れから、そういうふうに見るしかないのであろう。これらは本当は想像力を拒否するための物体ではないのか。

次に二道橋自由市場へ、時間早くいまだ開店していない店が多い。それでもひとの出入りが多く、ただ一つしかない小さな出入り口に両方から人々が殺到する。

南村さんと一緒に、中を歩いて閑散な向こうの端まで行き、二、三写真を撮っただけでもう一度その出口にたどり着いたとき、一段と両側からの押し合いは激しくなっていた。なかには自転車まで持ち込んでいる者もいる。私がようやく抜け出たとき、南村さんの叫び声を聞いた。ポケットに入れたカメラを盗られてしまったという。ガイドの朱さんから、くれぐれも持ち物には気をつけるよう注意されていても、あの状態ではやむを得ないことだと思う。

午後三時一旦ホテルに帰り、託送の荷物を出す。昼食後、もう一度出発。

今後は、普通の旅行者なみの観光コース、というより買い物コースか。ジュータン工場と玉の加工場。

そしていよいよ午後六時空港へ向かって出発。カシュガル行きは十八時十五分発の予定であったが、空港に着くと二三時発に変更になっている。これでは天山山脈も望めまい。広州からの飛行機が遅れている由。空港内の食堂でゆっくりと夕食をとる。珍らしく話題豊富な食事であった。

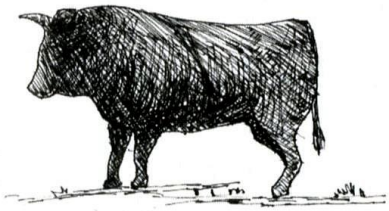
ようやくウルムチを発ったのが、午前〇時八分。隣の席にひとりの女子大生が乗ってくる。彼女は東京よりの十一名の団体のひとり。旅行計画時の予定の人員に充たず、添乗員なしの旅行になってしまったが、みな旅馴れた方で、中国もよくご存じの方ばかりだから団長がガイド兼務だという。

目的は、カシュガルからアクス、クチャの旅である。

私は最年少でただみんなに甘えてさえいれば可愛がってもらえるのだと、変なことをいう。海外旅行はこれまで一度だけ、昆明からシーサンパンナ（西双版納）に行ったことがあるともいう。

私はあまり知りもしないインドのことなどしゃべった。若いときにインドの現実をみて、カルチャーショックを受けるのが、あとの人生にいかに大きな影響力をもつかなど、『湖の伝説』の画家三橋節子の例までひいて強引にしゃべった。

ウルムチを出るとき、暇にまかせて、カシュガルまでの所要時間について南村さんと空論をたたかわせていた。彼によると、四時間近くはかかるという。北京ウルムチ間が二〇〇〇キロとして今回は一八〇〇ぐらいはあるだろうし、飛行機の種類も当然考慮しなければならない、と。



二時間たらずでカシュガルに着くなどとは思いもしないことだから、飛行機が着地体勢に入ったとき蜷川さんともどもクチャだと思い、地図を出してその娘にクチャの場所を探させた。

「これはクチャ経由ではないですよ。四時間？そんなにかかる筈ありませんよ」

結局、最後には娘にばかにされる一幕であった。

トヨタ・ランドクルーザー三台が空港の暗闇に待機していた。ホテルに向かってゆるやかに下っていく。

「新彊喀什賓館」（カシュガルホテル）着、就寝が午前四時になる。

**八月十三日　カシュガル滞在**

朝、暗闇のなかからアザーン（イスラム教徒の祈り）の声。

雨音かと思うと、楊柳（ポプラ）を吹く強風の音。窓が開けっぱなしになっていた。

朝食一〇時半。その後蜷川さんと散策に出る。

広いホテルの敷地を出るとすぐに橋があって、その下の急な流れはちょっとお目にかかれないような泥色を呈していた。水路の両側にはポプラの若木の並列があり、その白い幹と上部にすっくと伸びた緑が美しく、それらが水面に映えてひかり輝くような泥色を作りだしているのだろうか。赤味がかった水面には当然抜けるような青い空も反映していることだろう。

橋の袖には馭者が待機していて、われわれを見ると馬車に乗るようしきりに勧める。西瓜を地面に並べロバと一緒に買い手を持つ男。その側をシャンシャン鈴をならして激しく走り抜ける馬車がある。

ああ、とうとうウイグル世界の真ん中へやってきたという感慨がわく。

馭者があまりひつこいので、しばらく水路に沿ってポプラの内側の土手を歩く。最初の橋があって十才前後の兄弟らしい子供を撮っていると、その奥の建物の中から主婦らしい肥った女が手招きする。

はじめは何か売りつけるのが目的かと思ったが、そうではない。写真を撮ってやるとその同じ敷地内にある別棟の建物から次々子供がでてきて、その三人の子供ともども客間に入るようしきりに勧める。主婦はドアの内側の上部に掲げた額を指さし何か大切なことを説明する様子。さまざまな写真が整然と一つの額縁に収っていて、なかに日本人らしい男の姿もみえる。

ソファーはウイグル好みのぴかぴかひかる星形の装飾がほどこされ、小さな娘がそこに坐るよう促す。明るい清潔な室内で主婦は着替えはじめる。普段着のツーピースの上に白と黒の矢絣りのワンピースをはおり、それにあわせてスカーフも替える。娘たちも鏡の前で身づくろい。カーディガンを脱ぐとみんなきれいなワンピース姿である。いくら明るい室内といっても、フラッシュなしでは撮れないので、もう一度庭にでる。

門の内側にはブドー棚があり、紫蘇の花のようなもの、千日紅などさまざまな鉢植えが並び、三つほどもある鳥籠からは小鳥のさえずりも聞こえてくる。じいーんとするほど静かな環境であった。

四辻に出て坂を下るように左手の道を行く。やはり路の両側にはポプラの並木。それは溝のように掘られた底に植えられていて、時々水を流さなければ枯れてしまうのだろう。カメラを下げて歩くと、子供たちがつきまとう。馬車が激しく往き来する。ときおり小豆色の布（パルダ）を頭からすっぽりかぶった女たちが乗って行く。

行く手には広い市場があって、その場所の全部を使って西瓜ばかりの山があちこちに出来、いまも五、六台ものトラックから次々と西瓜を下ろしている。殆どが瓜のように細長いかたちである。

道路よりには、レンガを積んで一段高くなったバザールがあって、女たちがその台の上に坐ったまま野菜を売っている。ナス、トマト、ジャガイモ、シシトウなど馴染みのものが多い。タマネギ、ニンジン、カブラやダイコンなどの根菜類は葉っぱ付きのままである。

たとえばタマネギには白いもの、赤いもの、また黄味がかったものがある。ニンジンは黄色というのか、肌色の感じ。これらのうち中央アジア原産種は、シルクロードの要衝ここカシュガルを経由して中国から日本へ渡ってきた。日本原産の野菜としては、フキ、ミツバ、ワラビ、セリぐらいなもので、ほとんどの野菜が外来種であるという。

もっと歩くと道沿いに、なんとか店舗らしいのが現われてくる。岩塩を入れたアルミ製容器の横には、乾燥した家畜の糞を思わせる磚茶や飴がならび、小さな子供がひとり店番している。つくばってヨーグルトを売る男。木製の茶碗五、六個もつみ重ね、ただ一個だけを地面に広げた紺の布の上におき、それには冷風をさそうような真っ白なヨーグルトが入っている。

吐曼河までゆき、時間がないので引き返す。途中より蜷川さんと馬車に乗る。一元だというので乗ったが、降りるときひとり一元だといって、二元とられた。

午後四時半より、今度は全員車で市内観光に出発する。

中国銀行へ両替のため寄ったが、五時から営業とて無駄足。先きにアイティカル寺院・（大清真寺）へ行く。この辺が市の中心街だという。

もとイスラム教によって栄えた街で、このモスクが新彊省随一の規模を誇ると聞いても、寺院の内部はまったくお粗末なもの。ミフラーブには旧式時計がただ一つ。時間は二時十五分を指している。（標準時は五時十五分）

次に周辺の古いバザールへ。ここは完全なウイグル族の世界である。ただし、先住のアーリア系ソグド人やチベット人などと混血し、雑踏を行き交うどの顔つきが純血なのか、判断がつきかねる。被っている帽子ひとつにも民族の歴史の複雑さが見てとれるのである。

バザールの建物は周囲の建物の壁を利用し、細い木材で柱と庇をつくったバラックで、戸締まりも持ち上げた戸を下ろすだけの簡単な仕掛けになっている。

最初は毛皮の帽子屋ばかり。店先きにはさまざまな動物の形のままの毛皮が吊り下げられている。白いもの、黒いもの。青海の草原でよく見かけたヒマラヤマーモットらしきもの。白地に黒斑の入ったサーバルキャットか雪豹かと思われるものなど。

もう少し奥へすすめば今度は布製のウイグル帽ばかりが並ぶ。つばなしでさまざまな刺繍がある。モスクの庭で見た子供たちの被っていたのと同じ単純な柄のものを、私は十四元で買った。

バザールの通りは中で幾筋かが交差し、布地の通り。食べ物屋の通り。刀剣類ばかりの店がかたまった一角。食品とくにスパイスの店。ボタンなどの小間物の店など。それらが種類ごとに区分けされて営業している様子だが、そんな中までロバのひく荷車が往来し、喧噪をたかめているのである。

綱や紐ばかりを並べた店で、頭を丸刈りにした大男が物差しを持ったまま、紐のなかに俯せになって眠っている。路上では回族らしい男が子供の頭を刈っている。バリカン一つの床屋である。

そこを出てひとりになり、アーケード風の新しい衣料品のバザールを覗く。三つの狭い通路が背中合わせになっていて、ここでは既製品も多く、積み上げられた新彊シルクのそばには仕立屋もある。

広場へ戻りいよいよ職人街へと思ったときには、もう集合の時間がきていた。もっともカシュガルらしさが見られるものと期待していただけに心残りであった。

再び車に乗り、香妃墓へ。正式には、「アバ・ホージャ廟」といい、このシャンニャンニャンミャオ（香娘々廟）という漢語の通称名のなかには期せずして少数民族ウイグル族の悲哀と夢が結晶しているのである。伝説はさまざまなヴァリエーションをもって語りつがれてきた。京劇にも、『香妃恨』というのがあるほどである。

カシュガルが史書にあらわれるのは紀元前二世紀、漢の武帝の時代からで、当時疏勒（そろく）国といい小さなオアシス都市に過ぎなかったが、さすが交通の要衝、周囲の大オアシスに比べても市列（バザール）だけは異常に発達していたことが知られている。紀元前後からは仏教が入りはじめ、三蔵法師玄奘が天竺からの帰り立ち寄った六四四年には、伽藍は数ケ所、信徒が一万余人もいて小乗教の説一切部を学習していた様子が記録されている。ただし、チュルク系民族の西方への移住が激しくなっており、疏勒王は突厥の首長の娘を妻にむかえていたということである。

いよいよ八世紀になり、北モンゴリア出身の鉄勒という部族のなかに興ったウイグル（回鶻）が突厥を破って東トルキスタンを支配するようになる。ウイグル族は匈奴や突厥と同じ遊牧民であったが、先住民であるアーリア系民族と混交し、ついには完全なオアシスの民となり、宗教はペルシャのマニ教を信じたのである。

それが十世紀から十一世紀にかけてイスラム教の世界となり、続いて中央アジア全域にわたってチンギス・ハーン、ティムールの強烈な征服の嵐が吹きあれる。

時代が下ってカシュガル汗アブドル・ラシード（一五三三―一五六六）は、サマルカンドからやってきたイスラム、スーフィー教団の長老マハドゥミ・アゼムという人物に心酔し、土地などを寄進するだけでなく、政治にも関与させ彼をホージャと尊称した。これが聖族ホージャ家の始まりである。

「アバ・ホージャ廟」の中には、このホージャ一族の五代にわたる陶棺が七十二個もあり、香妃の墓といわれるものは最後列右よりに母なる人のものと並んで置かれている。

棺は子供らしい小さなものもあるが、すべて藍色のタイル張りで、その上にさまざまな色の布がかけられている。私はガイドの説明を聞かずに外へ出た。

陵墓の建物は正方形で、ドームを囲むように四隅に円柱の塔があり、ドームは緑のタイルばかりの微妙な色彩の振幅で、きらきら光り輝いている。

内部では、数多い香妃伝説のうちウイグル族にとってもっとも感動的な物語りが語られている筈である。しかし、私は円塔と一部の壁面にあまりにも無造作と思えるほどアトランダムに填め込まれたタイルの色彩に魅せられて、その撮影に余念がなかった。

建物の裏側にまわると、たとえば円塔のタイルは当然濃い緑が主調になっているのだが、黄色の部分があり、また藍の幾何学模様、花模様がところどころ二段ほど取りまいている。場所によっては緑の中に異分子のような形容できない色彩と図形があって、これは緊急の補修のあとではないかと思ったりするのだが、それを全体として見直すとき、細部の汚点までがアクセントとなって妙なる色彩の音楽を奏ではじめるのである。

目眩いするほどの渦巻き様つる花。その同じ模様の連なりが、手書きのためか一つとして同じものはなく、組合せの方向もまちまち。その藍の濃さは染め付皿を見るような美しさである。

やはりもっとも感動したのは藍一色の集合である。その一枚一枚がわずかばかりの色差をもっていて、白いセメントの隙間を隔て、微妙に交響しあってちょうどパウル・クレーの色面を見るような安らぎを与えてくれるのである。

ときに周囲のポプラ樹のかげと雲のかげが、色のついた風のようにタイルの上を渉っていく。

香妃の墓が贋物であり、またホージャ家の末路が乾隆帝の回彊討伐によるいかにも屈辱に満ちたものであってもよい。ここに立つ私には、ウイグルの人たちがこの陵墓に寄せる誇りが当然で正当なもののように思われてくるのである。

夜十一時、外はまだ明るい。室温三十度。夕食後に明日からの旅程について注意あり。まず車は、ランドクルーザー三台とトラック一台。

一号車　松原正毅（隊長）、鈴木智子、南村篤馬それに中国側の通訳と連絡官
二号車　吉田昭子、茂木昭子、蜷川　茂、安井道夫
三号車　古川誠子、滝川悠紀夫、佐藤　健、中江啓介（西遊旅行社・添乗員）

吉田先生（内科医）から。長い旅だからいろいろ不満も出てきて、それがたまると思わぬ事態が発生することもある。もし不満があれば、その都度発言して発散させるように。もう一つ、隊長の言葉には絶対従うように、と。確かに高山病には身体的症状のほかに精神的な不安定がしばしば見受けられるようである。

**八月十四日　カシュガルーイェチェン（葉城）**

朝目覚めると八時五十分。九時から朝食と聞いていたので、あわてて顔を洗い、髭を剃る間もなく荷物を作り、食堂へ走る。このホテルはもとのロシア領事館で、食堂は少し離れた別棟の建物である。そこへ行く路沿いに楡樹が特有のこんもりした豊かさでならんでいる。

スウェン・ヘディンは彼の第一回探検の途次（一八九三年）、旧知であったロシア総領事ペトロフスキーをたずね、ここに五十日間滞在した記録がある。

いよいよ今日から、カイラス山とチャンタン高原に向かって困難な車の旅がはじまる。十時出発予定が、中国側の人員紹介等で手間どり十時四十分出発。

まず昨日蜷川さんと歩いたバザールへ寄る。日曜日とあって昨日とは見違えるほどのひとだかり。道一杯に荷車やひとびとが往来する。面白いが時間がない。

それから四十分ほど走ったポプラ並木の真っ直ぐな道で、三号車が警笛を鳴らしながらわれわれの車を追い抜いていく。何ごとかと思うと、滝川さんの荷物一つを積み忘れてきたという。一号車がホテルまで引き返す。

ヤルカンドの遺跡見学の予定があったが、取り止めて一路イェチェン（葉城）へ。途中のヤルカンド河は激しい濁流であったが、行く末はタクラマカン砂漠の中に消えていく運命にある。カラコルムや崑崙の雪解けの水を集めたスケールの大きな河で、大小のオアシスをうるおしながら、他の河川とともに砂漠のなかに吸いとられてしまうというのはいかにも不思議な話である。

イェチェンの街も日曜日とあって、街路一杯の喧噪でそのなかを分けるようにして車は登山協会招待所に入った。食事の後、写真撮影のため街へ出る。

時計が午後四時を過ぎても、ここの時間では真っ昼間。帽子なしで歩くと大変な暑さである。招待所を出るとすぐ国営商店か、内部は暗く四つの壁にむかって平行に同じようなガラス・ケースが並び、食料品や日常品が陳列されているのだが、まったく埃っぽく、もうずっと以前から中国のあちこちの街で見掛けたのと同じ雰囲気をただよわせているのである。ただ、入口近くスルメとかワカメとかの海産物が目についた。

バザールにはガラス・ケースの容器を積んだ二輪車が多い。赤ちゃん用ベットを思わせる装飾過多の台つき。そのほか布を敷いた板の上にケースを置いただけのもの。これらには柱の少ないテントの屋根がかかっていて、パン、ウドンなどの食べ物を売っている。

岩塩の塊りを敷物いっぱいに並べ、その中ほどで細かくたたき割っている男がいる。また鳩と兎を売る少年たち。道路わきでは刈りとった羊毛のうえに桿秤一つ。男たちは売物に背を向けて話込んでいる。

荷車が一ケ所に何十となく集められていて、その重なりの向こうに馬や牛が言葉どおり犇きあっている。荷車が邪魔になって、なかなか中の方が覗き込めないでその周辺をうろついていると、髭を長くのばした老人がその上に上がれという素振りをする。私が上にあがって撮影する間中、老人は車の柄を支えてくれていた。

夕食前、会議室で松原先生（国立民族学博物館助教授・社会人類学専攻）の講義を聞く。カイラス山巡礼の特殊性について。サンシュンのグゲ王朝の歴史。その外ボン教のことなど。非常に要領のよいお話であった。内容はその場所場所へ行った都度引用させてもらうことにする。

続いて地区体育委員主任の揚萬新さんから、この地方の概要を聞く。イェチェン県の人口は約二九万人。面積二六万平方キロ。全人口のうち漢族はわずか二万人、しかもそのうちの八〇％が解放後の入域であるという。少数民族の人口比はウイグル族が断然多く、七五％を占め、ハザク族、タジク族、キルギス族などが各五％あて。ほかにウズベク族が千人から二千人まで、回族が約一〇〇人いるがチベット族の定住者は居ないということだった。

イェチェンはカシュガル、ホータンまたはチベットへの道の要衝に当るため、クチャに次ぎ、区全体でも二番目に大きな県だという。

果物、とくにリンゴのふるさとで、その外ナシ、黒ブドウ、白ブドウ、ザクロ、モモ、アンズを産す。農業としては、綿が有名で、解放後の五〇年以来栽培している。穀類は小麦、トウモロコシ、エンドウ、緑豆、大豆を産し、一部カシュガル方面へも

提供する余裕があるという。

住民は殆どが農牧畜民で家畜はヒツジとヤクで、そのうちヤクはキルギス族だけが放牧している。

一九七九年はひとつの転換期で、生産請負制へも移行した年で、その年から学校でもウイグル族と漢族は各自別個の施設で学ぶようになったということである。

私は疑問に思っていた荷車のことを聞いてみた。今日のバザールは日曜で、普段の日とは比べものにならぬ人出で、周辺の農牧民たちも馬車に乗ってやってくる。その馬車を預っている姿だという。一種の駐車場である。そういえば馬や驢馬は、横に渡した何本かの丸太にもう立錐の余地のないほどの状態で結わえられたもの、また巨木の枝に何十本とない綱が集中しているものなど、その中で馬たちはただ無聊に起ちつくしているように見えた。

**八月十五日　イェチェンーークディ（庫地）**

浅い眠りであった。昨夕、松原先生の講話のあと、健康管理のためとて全員の脈搏、血圧を計る。蜷川さん血圧が高すぎ、熱っぽいとて部屋に帰って息む。昨夜、二度下痢したから、今朝の食事は抜くという。

今日の走行予定一六六キロと少ない。トラックが到着していて、中国側は早朝から食料買い出しで大変だった様子。ただしトラックの積み荷の大部分は燃料の入ったドラム罐で、その上に穀類の入った木箱や野菜の袋、テントなどを載せる。新彊の車にはチベットで石油供給することができないので、向こうで車交換のときまでの分を確保しておかなければならない。

十一時半出発。見わたす限りの平坦な大地に、一種類だけの枯草が点々と残っている。そうして道路から遥か隔たった場所に、ラクダが五、六頭だけ放牧されている。

もう乾季に入りはじめたのか。五月頃はこの辺りの草も青々と新鮮な姿をみせるという。峠にかかるまえ、小雨のなか、小さな村の庭先へ入り昼食。

その土塀で囲まれた、家畜の追い込み場とおぼしい場所に三台の車を止め、途中の村で買った西瓜、瓶詰めのミカン、コンビーフ缶、招待所から持ってきた饅頭などをひろげた昼食である。中江さんより大きなスプーン一個を預かり、以後必要に応じて使用できるように各自保管すべく言い渡される。　地面に坐り込むには、ちょっと寒すぎる。食事はそこそこにして、土塀を伝って家屋の屋根に上がってみる。下からは平坦に見えた屋根も、歩くと穴があくのではないかと思うほどぶよぶよとして、柴程度の木の束に泥を塗り込んでならしたものか、柱の上を歩かないと危険である。煙抜きも穴を開けただけのとても煙突といえるような代物ではない。土塀も壁もただ泥を塗り込めたものか、煉瓦様の痕跡はない。

雨雲のせいか周囲の山々は急峻な傾斜を見せながら壁土と同じ色あいを呈し、風化したその形状はまったく重量感を伴わない。

いつの間にか、壊れかかった土塀の上に子供たちが坐りこんで、こちらは一種の見世物になっている。肩下までかかる薄物の白いネッカチーフを被った女の子。鳥打ち帽の男の子。辺境のわりには皆きちっとした服装をしている。中年の女性は、アラブ風に白い布を頭から口にかけてぐるりと巻きつけ、目と鼻だけ出している。

すぐ近くにも民家が見え、土塀に囲まれた広い放牧場があり、そのなかにだけ揚柳の緑が見える。

アカズ峠の周辺はすでに崑崙山脈の前山であろうか、やはり岩石は柔らかく、風雨に侵食された奇怪な空洞がいたるところに眺められた。標高三、三二〇メートル。峠で撮影のため車を降りたが、風の冷たさに皆早々に車内に逃げこんでしまう。今朝までの暑さが嘘のような気がする。

峠から一旦一、三〇〇メートル下り、今日の宿泊地クディ（庫地）の兵站に着く。周辺にいくばくかの耕地の緑をもつが、兵站はもう殆ど垂直に近い岩峰にかこまれた狭い谷間にあって、息苦しいほどの圧迫感がある。

部屋の割当て（今日は松原先生、蜷川さんと三人部屋）の後、第一回目の高度順応登山のため四十分ほど車で登る。雨がまた降りはじめる。

この道は明日もう一度走る道なので、往復一時間余りはなんだか無駄な気もするが確かに周辺には登れそうな山はない。道路と谷川とわずかばかりの荒地と、あとはそれに接して急に盛り上がった岩峰の峻しさだけである。

途中、三、六〇〇メートル地点でラクダの放牧を見た。松原先生は、これがラクダとしての高度の限界だろうと言われる。なるほどヤクの姿もようやく目につきはじめる。

目的地はゆるやかな草原状をなし、左方のやや急峻な斜面を登れば四、〇〇〇メートルに達するという。色とりどりの雨具を着て歩きはじめるのは華やかなようでも、雨霧にかすみ靴底に泥が重たく附着するような状況のなか、すでに高度の影響を受けはじめた人たちには相当過酷な条件であった。

ときには風と雨とが眼鏡を吹きとばすほど激しく叩きつけてくる。

中腹の岩のある場所が三、九〇〇メートル。今日のところ目的を達せず、その場所から引き返す。

**八月十六日　クディーー三十里営房**

朝九時起床。兵站の夜具しめっぽく、あまりよく眠られず、夜中二度トイレ。

室内の温度一六度。十時四十分出発。今日は三十里営房まで二〇〇キロあまり。所要約十時間の予定。

途中の昨日登った山も夜中の雨が雪となり、うっすらと雪化粧して、見違えるほどの光景である。行くほどに、もはや崑崙山脈の真ん中に入ったのか、山のかたちがいよいよ荒々しく、鋭利に尖った岩峰が高さを競い、それぞれ勝手気儘に自己を主張するような豪壮な姿に変ってくる。

すぐそこの谷間まで氷河の末端が流れでている。上部が霧にかすんでいるだけに雪峰はより高く崇高に眺めやられる。そんな谷間の石ころばかりの河原に、何十頭と羊とヤクを放牧している男がいる。多分キルギス族なのだろう。

道端の池には一面氷がはっている。後ろの座席でうつうつしていた茂木さん、ヘヤピン・カーブにかかったとき、高度反応の嘔吐あり、酸素ボンベより酸素を補給する。

セクラ峠、標高四、八七〇メートル、これまでの最高地点である。ここの岩膚は代赭色を基本としていて、黒っぽいものにも赤色が加味され、なんだか異様な雰囲気をもっている。その岩膚に、凍てついた白い雪が付着して、どんなに急な斜面のどんな小さな線にいたるまでも浮きたたせ、硬質に固まって低温特有の鋭い光を放っている。またその上に突出した岩峰ではいっさい雪をまとわず、ただ黒々とのしかかった姿が、垂れ込めた雨雲をバックに一層鮮明に浮びあがってくるのである。色彩が抜け落ちたかと思うほど白っぽく、それが山膚に嵌入しているところもある。

私は峠の向こう側を撮影しようとして、山に対って歩いてみる。さくさくと霜柱を踏む感触がここちよい。車を降りても小用をする者のほか、車の周辺から離れる者はない。まだまだ高度順応にはほど遠い気がする。

峠を下りマザ（麻扎・三、七五五メートル）の兵站で昼食。われわれ二号車の運転手王明星さん、高山病の症状がでてきたのか、食事もせず車の中で俯せになったきりである。茂木さんも未だ調子悪し。

ここは急峻な岩壁に崩壊した砂をまぶしたようなきめ細かな地はだの山塊に囲まれているが、面白いのは崑崙の西端がもっとも近くカラコルム山脈に向かい合う場所で、兵站の前をあのヤルカンド・ダリヤが流れているのである。水量はそれほど多くないにしても、川幅からみればもう一流の河川となり、ほとんど断崖といっていいほどの河岸段丘が両岸に発達している。

そうしてこの河を東にむかってさかのぼり、二時間ほどして別れると、やがて車は四、八五〇メートルのヘイカー峠にさしかかる。セクラ峠以上に異様な色彩の地層があちこちに露出して、生命とはまったく縁のない世界である。

崑崙山脈といえば、私はなぜか唐の詩人岑蔘の詩、「胡笳曲送顔眞卿使赴隴西」の一節を思い出す。「崑崙山南月欲斜　胡人向月吹胡笳・・・」と。樓蘭、蕭關、秦山、隴山などの地名もあり、ずっと東からの思いであり、それが遠い思いであるからこそ私にとっては、「シルクロード」の名以上に辺境への興味をかりたてていたのかも知れない。

「紫髯緑眼」の胡人が、アーリア系のソグド人であることすら気付かなかったずっと以前の話である。しかし古代において、この山は天帝女媧の下都として特別の意味をもった神山であり、世界の中心と考えられていた。それは巨大な柱でもあり、天上と地上を繋ぐ唯一の通路で現在のカイラス山同様一種の聖域としての他界であった。

さて現実のクンルン（崑崙）山脈は大小の山脈を包含し、西はいま通ってきたばかりのパミールの東端ヤルカンド・ダリヤ附近に発し、東に向かって四川盆地西部まで全長約二、五〇〇キロ。その東端ではアムネマチンを含む積石山脈、長江と黄河の分水嶺を作るバヤンカラ（巴顔喀拉）山脈、それに北のココシリ（可可西里）山脈と幅は膨大に分岐する。

もはや世界でも残された珍らしい秘境で、野性動物の宝庫でもあり、ＮＨＫなどの取材班がねらっているのも無理からぬことである。

今日は車の前部に坐ったので、走行中も撮影できたのは有難いが、峠を下るとまたしても嘘のような暑熱の世界である。まともに陽を受けるだけに窓ガラスを開けてみても一向にすずしくならない。

今度現われた河はカラカシュ・ダリヤで、これまた崑崙山脈を横断してからはホータンのオアシスを潤おし、ついにタクラマカン砂漠に消えてしまうのである。

宿泊地三十里営房の兵站はまったくの砂漠地形の中にあった。標高三、七〇〇メートル。解放後、国防上の必要から作られた施設ばかりで、軍関係の建物のほか民家一つ見あたらない。

夕食後、第二回目の高度順応登山についていろいろな意見が出た。食堂の裏側に一部壁のこわれたところがあって、そこから外へ出てみると、広大な荒野とその向こうの山々が一望できる。明日は是非四、〇〇〇メートルまで登らなければというのだが、ここでも山は大きく急峻で、しかも表面に砂が附着しているようで足場が悪く、適当な山はなかなか見付からない。

私はこの団体では無理してあまり高く登るのは、本番のためにも逆効果しかないのではないか、といったりした。

そのうち左方の前山なら、なんとか高度もかせげるのではないかという結論がでた。後、蜷川さんとその山裾まで行ってみようと歩きはじめた。

褐色の大地。まったく大地といった表現そのままの荒野が、わずかばかりの起伏で山裾まで続いている。なかにはひとの歩いた道らしきもの、水路らしきものもあるにはあるが、一面大小の石ころがごろごろしているばかりである。

その石とも岩ともつかない物体の腹部には風穴があき、どれもこれも奇怪なかたちで、色はまったく土と同じ褐色をしているのが、一層不気味に見えるのである。何の障害物もないので、思うとおり一直線に歩くことができるのだが、やはり山に近づけばゆるやかであっても道は上りになる。

一時間近くかかっただろうか、ようやくその山裾にたどり着いた。登ってみると、遠くからは硬く見えた岩石も、風化で偏平に剥離したものか、尖った岩に足をかけてもばらばらと薄くはがれて崩れてしまう。無理して登ってみても、ずるずるとすべり落ちてしまうのが関の山である。

**八月十七日　三十里営房滞在**

夜中にトイレに起つと、小便が吹きとばされてしまうほどの風、寒い。

朝、小雨あり。山頂には新雪。

十時朝食。十一時より第二回目高度順応登山に出かける。中江さんより、昨日行った場所へ案内してくれとの事。登れない山裾へ行っても無駄だから、ちょっとおかしいと思っていたら、中央の砂丘状の山の方のことであった。車で迂回し、岩石の乱雑にちらばった間を抜け、山裾を戻って行ったが三号車が故障、全員そこから歩くことにする。ゆるやかだが長い上り道である。

この間ほどではないが、今日も雨具が必要である。結局目的地の山へ登ったのは、松原、蜷川、古川、中江と私だけで後はみな途中から引き返したようである。ただし、あれだけ歩いても標高はわずか三、九九〇メートルに過ぎなかった。

中国旅行社の朱さんのこと。山からの帰り、ひとり岩の上に坐ったまま動かない。少し疲れ気味だったという者もあり、宿舎へ帰ってからもみんなで大さわぎ。望遠鏡を持ち出して覗いてみても、依然動いていないから、車を出して迎えに行こうかなどと心配する。

ところが帰ってきた本人は、しゃんしゃんして元気そのもの。岩の上でシャッター・チャンスを待つのに一時間余りかかったという。

午後休息。なにもしないというのは疲れる。夕、もう一度写真撮影のため外へ出る。風強く寒い。折角持参したのだからと、一五〇ミリ望遠レンズと三脚をはじめて使用する。望遠レンズで覗くと、風景はいよいよ奇怪さを増し、灰色の斜面をひかりが渉っていくときなど、とてもこの世のものとは思えない不思議な色彩を現出するのである。

**八月十八日　三十里営房——大紅柳灘**

夜中快晴、満天の星をみる。案外暖かい。

十時朝食。今日の予定はわずかに一二四キロ先の大紅柳灘まで。車で約四時間。ただし向こうに着いてから、第三回目、最後の順応登山をする予定。相当な急斜面を四、五〇〇メートルぐらいまで登る由。

今日が全員の体調の分かれ目になるという。たとえ体調の悪い者がでても、もう簡単には引き返すわけにはいかない。（出発準備の会合のとき、中江さんは次のように言ってみんなを怯えさせていた。もしものことで途中病気になっても、その人を置いて予定どおり進むしかないのですから、カシュガル経由でひとりで帰ってもらいます。

車をチャーターするにも車があるとは限らないし、その交渉もひとりでしてもらわなければならない。少なくとも余分の金を二、三十万はもっていってくださいよ、と）

ただ、今日持ち堪えたら、後は徐々に高度にも慣れてきて楽になる筈だという。

道路わきの砂のなかに、里程標を思わせるいくつかのイスラム教徒の墓。道路工夫のものか、白いテントが二つ。それ以外に人間の痕跡はなにもない。山はそれほど高くは感じられないのだが、上部は雪をまとった峨々たる山容。まったくそういう形容の仕方しかない岩山らしい岩山が、応対にいとまがないほどさまざまな形で現われ出てくる。下部は赤茶けた砂岩か、あるいは崩壊した扇状地の砂漠である。

水のない広い河原を迂回するように渡ると、上りになってもう一段上の高原に出る。そこで一号車、エンジン・トラブルのため停車、修理に時間がかかる。

大紅柳灘兵站。標高四、〇八〇メートル。中国側を除き、男七人全員ひと部屋で宿泊となる。

午後五時一五分より登山開始。登るのは兵站のすぐ裏山であるが、こちらからは殆ど垂直の砂の斜面のようにみえる。道といえば、白っぽい線がその褐色のなめらかな肌に、逆くの字形にかすかに浮びあがっている。果して滑らずに登れるのだろうかという危惧があった。

ゆっくりと踏みしめるように歩くが、さすが四、〇〇〇メートルを超えると息切れがする。ただ前二回と違って晴天なのが有難い。みな自分のペースで無理せず歩く。

下からは想像もできなかったことだが、頂上は平坦な広場で粘板岩のスレートの山である。その岩石ばかりがそこらじゅうに散乱しているのである。三回目にしてようやく四、二〇〇メートルに達したことになる。所要時間は各自まちまちだが滝川さんを除き全員登頂。

向こう側の谷は広大な河床だがほとんど水はない。白い石ころばかりの河原で、これがカラカシュ・ダリヤの上流なのだろうと思う。遠くに氷河をたくわえた山も見える。

山から帰ると、室温一四度、夜は冷えそうだ。佐藤さんの話。「富士山登山よりよほどきつかったですよ。富士山の場合は、下がしっかりしていますが、ここは砂地でずるずる滑るし、よほどえらかったですよ」と。

兵站の飲料水は、食堂の斜め前にある井戸を利用している。水がほしいというと、兵隊が鉤のついた綱にバケツを引っかけするすると器用に汲みあげてくれ、私が部屋まで持って行こうとすると、すばやく両手にバケツを持って走り出す。みんな若くなかなか親切な兵隊たちである。

**八月十九日　大紅柳灘ーートォマ**

前夜も浅い眠り。十時の朝食予定が、今日の行程が長いからとて、朱さんが突然九時に変更だと言ってくる。結局九時半食事。女性たちの食事に手間どり出発遅れる。昨日の疲れのためか。

いよいよアクサイチンへ。三五一キロを約十時間かけて走破の予定。

中国製以外の地図なら、どれにもアクサイチンの場所に斜線が入っていて、いまだに周辺と区別されている。これは古いシムラ会議（一九一三ー一四年）での英国全権マクマホンが画定した国境線で、この領有をめぐって一九五八年以来中・印間で大きな武力衝突に発展していった。

しかしわれわれの通過する幹線、新蔵公路は、それ以前に中国側によって開削されていたばかりでなく、その紛争地のど真ん中を横切ってみてもまったく何もない言葉どおりの荒蕪地なのである。

南方のパンゴン・ツォの水面とかチャンチェン渓谷などを除いて、一体どんな戦略的価値があるのだろうか。崑崙の主脈を離れると、確かに山容の鋭さは消えていくのだけれど、それだけ余計に宏大無辺の感じは強くなる。

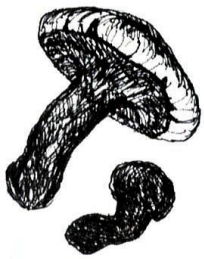
赤茶けた大地、砂礫、角礫岩、それほど厳しくない山のうねり、それだけ。

非常という言葉すら不似合いなほど何もない。鳥のささやき、動物の影もない。

道路わきを清冽な水が流れても、水草だけでなく水ごけすらもつきかねた石ころが、いま掘削したばかりの水路を思わせる。アクサイチンとはチュルク語系で、「白い河床の泥草」を意味し、そこら中植物の化石が散乱するといっても、いまは昆虫の姿さえ見えないのである。

砂漠の好きだという日本人にも一番苦手の部類に入る風景でないかと思う。

「あの青海のときは面白かったですね。いろんな動物が次々でてきて。草原もあったし」と吉田先生。しかし先年、「青海高原揚子江源流域・唐古拉山脈学術登山隊」で、青蔵公路を走破された松原先生の意見はさすがに違う。「すごい風景ですね。青蔵公路ではこれほど何もない場所はないですよ。よっぽどひどい風景ですよ」と、少々興奮気味に話される。



不出来な、そして乱雑な道路の線と、ときたま現われでる電柱の並列、そけだけが人工物である。

動くのは雲のかげだけ。それが黒々と、ときに激しく動く。巨大な生き物のように、褐色の大地を移動する。そのかげの濃さが美しく、車もろともかげに呑み込まれるとぞっと寒気がする。

そんな高原の道端に車を止め昼食をとる。相変らずの昼食で、ビスケット、カロリーメイト、コンビーフ、パック入りジュース、ミカンの瓶詰めなど。風強く寒い。食欲もないのか、車外へ出るものは少ない。突然、朱さん愛用のサンバイザーが風に吹きとばされ、遥か向こうの山裾の方へ転んでいく。朱さんが追っかける。帽子はどんどんと離れていく。見兼ねた車の一台がそれを追っかけていった。

まったく砂の海といった峠を下り、一層荒い砂のなかを行くと、褐色の土壌がいくぶん黒っぽくなり、そのうえにアルカリか塩か、白っぽい部分が斑雪模様に蔽い、そして突然に夢のような湖がみえはじめる。はじめは青い帯のように細く、それが砂浜をへだてて見えてくると、同じ青さにも変化があり、紫がかった中心から藍にひろがり、周辺は覗き色というのか薄い空色まであって、その水面がきらきら輝いている。もはや水面というより固形化した重さを感じさせる。

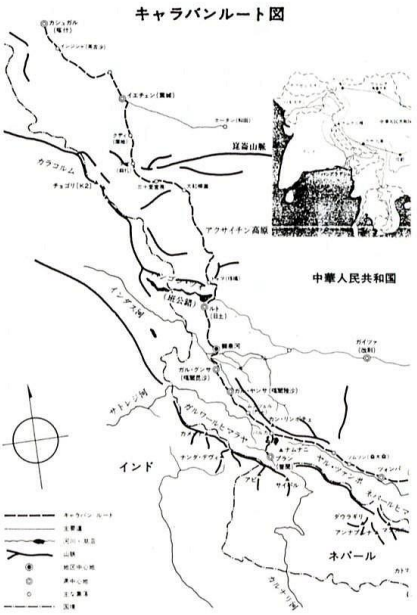
中州には、小さな富士がたの格好のよい山まである。

ほとんど黒っぽく輝く湖面があり、向こうの山にむかって幾段にも違う青の色調を作っているような湖もある。

広い高原のなかに「空岔口」（四、八五〇メートル）の標識があり、ようやくこれが新彊とチベット自治区との境界となる。カシュガルから一週間目にあたる。

さすがチベットに入るとわずかばかりの生命ながら、黄色の枯草が現われ、少数のヤクやヒツジの姿も見えはじめる。こんどは五、二五〇メートルの界山大坂へ。そうして少し下れば五、〇〇〇メートルの高所に濃紺のロンム・ツォ。もちろん方向によりその色彩に濃淡や色の厚みに変化があるとしても、色のあせて白っぽく輝く砂地の向こうにある、この青のきつさは何と名付けたらいいのだろう。水底の地形によるのか、一部はほとんど濃紺というより黒に近い部分があるにはあるが、私は空の青さにも一切ひけをとらないこの青の深さに驚いてしまうのである。

そうして景観が気味悪いほどの赤茶けた土壌にかわっても、苔に近い草はますます緑を増してゆき、家畜の群れも頭数が増え、そのうち湿地を伴ったトォマの兵站が見えてくる。標高四、四九〇メートルである。




## ●ふるさとかるたを発行●

山崎町教育委員会では、「ふるさとかるた」を企画され、六十三年七月町報に、募集を呼びかけ、また管内の各小、中学校にも応募を慫慂されたので、応募は題材について二百七十点も殺到した。

そこでこの製作には、文言、絵画、解説、の各部門に適材適所の十八名の委員が委嘱されて、スタートした。

先ず文言委員七名が、応募のあった文言約千通の中から旧蹟、文化財等にぴったりの措辞を選ぶのが大変。四、五回も会合を重ね満足出来る措辞が選べたと思う。絵画委員三名の方は、古い銀山跡とか、イワヒバ群落とか現地を見て廻る情熱を示され、解説委員の方々は、旧史蹟、名刹、考古学等に通暁されている方ばかり。一字一行も疎かにせぬ情熱を傾けての解説であった。

このかるたがふるさとの文化高揚の一助となることを念願します。

最後になりましたが、協力していただいた多くの先生方に、心から御礼を申し上げます。

# 私のふる里頌

松井叔生（洋画家）
二紀会理事

先年山崎文化会館建設に伴い山崎町役場企画課の方から、ホールに飾る緞帖の原画制作の依頼を受けました頃、丁度私は東京で大手の画廊の企画、現代作家自選展シリーズで、私にとって五十才と云う人生の節目に当る個展ともなり、私の作家生活をふり返り初期の作品から現在まで主に私の所属している美術団体二紀会展に出品してきた大作を中心に大掛かりな展覧会を終えたばかりでした。これより少し前、読売新聞の塩谷孝雄氏や姫路商工会議所の椴谷力生君らの肝入りで、姫路「やまとやしき」で個展を開き、山崎から和田秀男氏、神戸新聞の藤村さんらたくさんの先輩、そして同窓の諸兄に観て貰うことが出来たことも御縁になったのでしょうか…。ふる里の暖かい心にふれて、緞帖の制作に伴う取材に何度か山崎町の奥地にまで訪れる事が出来ました。

都会に住みついて、いつの日か忘れ去っていた郷里の美しい自然、私の心の奥底に閉ざされていた遠い日の多感な想い出がよみがえり、私の情操を培ってくれた、原風景の確認に大いに役立った様に思います。

昭和六十一年に山崎小学校図書館完成に寄贈させて頂いた「光る野」もそんな想い、自然の大気の中に生きる母と子の光景を母性愛の象徴として描いたものです。

近年、自然と人間をテーマに幻想的に生命の象徴としての裸婦など、人間の内奥を暗示する作品等に、昨今胸中に飛来する、ふる里の風の香り、私を育くんだ風土、自然の優しさや、デリケートな風趣など、幽遠なるものの心を如何にして画面に生きづかせ得るかが大いなる課題となっているのです。

「やまさき文化」が発刊される頃、昨秋第四十二回二紀展に出品した作品「レ・トロア・グラース」（三美神）が巡回先の広島県立美術館に陳列されているかと思います。三美神に名を借りて、私の心の詩、さわやかな自然（裸婦）を叙情と幻想の世界に昇華させ詠い上げたものです。ふる里を思いつつ……。

昨年TV「美に生きる」に出演した縁で来る五月には岐阜市の高島屋で、日本の自然、岐阜の四季、風物などを織りまぜて、個展を開催すべく準備しています。これも又わがふる里、山崎に似た、山と川のある街、日本の心を描く展観になろうかと思います。いささか私事のみにすぎましたが遠くにありてこそ想う、私のふる里頌です。

# ＊嘘＊

山崎保健所長
医学博士
北岡　修

どうもいわくいゝ難い異和感が体に走る。震えを伴うような妙な不安、不全感が頭の中だけでなく全身を貫く。若い頃から、こういった現象を時折感じていたが、最近ことにひどい。精神医学からいえば、こういった状態を不安神経症として簡単に説明してしまうのだろうが、そういわれても釈然としない何ものかが残っていて、時々地震のように前ぶれもなく、この不安発作がおそってくる。

ところが、先日の宮沢蔵相の辞任劇を視たとたん、「これだ」「こゝに原因があった」と悟らされたのだった。リクルート疑惑なるもののニュースが日毎激しくなるにつれ、私の莫とした不安、不全感も強くなっていった。元々、犯罪に関する報道に接すると、まるで自分自身がその罪を犯した人物であるかのように罪意識といった痛みを感じてしまうのである。しかし、今回のリクルート疑惑のニュースは、いつもの罪意識みたいなものだけでなく、不快ともいえる嘔吐感を伴う不安、不全感だった。しかも疑惑事件の暴露そのものが、姿なきものに操作されているような一種作為体験に似た感じもあって、いわば分裂症の世界にいる気分におそわれていた。

日を追って苦渋がにじみでるような表情だった宮沢蔵相が辞任を決意した日にみせたあの笑顔。誰も、いや宮沢さん自身説明できないのではないかと思わせるような、一見したところ全くさわやかそうに映った、あの宮沢さんの笑顔。その映像を視たとたん、「これだ」と感じたのだった。

「嘘をついている」この意識が幼ない頃から私自身の心底にヘドロの如く貯っていたのだ。嘘が罪の始まりと厳しく祖父母から教えられたのか、嘘は絶対にいけないものとしみこんでいたのだ。しかし、幼い頃の家庭内は恐しい人間関係が渦巻き、ものいえば嘘になり、ものいわざるも嘘になるといった地獄だった。それでも生への執着がきっかったのか、家出も自殺もせず、そのうちに人生には嘘も必要とウソぶくようになっていた。困った状況に追いこまれると一見さわやか笑顔でとりつくろった。

街頭でのインタビュー、多くの人は宮沢辞任を「当然」と、これもさわやかな表情で語っていた。私はうらやましかった。私も「当然だ」と、ためらいなく云いたかった。しかし、自分がいかなる時でも、なにがしかの嘘を付け加えていると意識していては、とても「当然」といゝきる勇気がない。そして、この話にも嘘が混じっている。

## 短歌
# 歌集「対偶」に寄せて

稲村幸子

「対偶」は、雪の音、愛日、遍路、落葉の節、に次いで、昭和五十九年四月から、六十三年三月まで四年間の作品中、五三八首を選んで上梓された藤村省三氏の第五歌集である。

あとがきに「喜寿を迎えた私にとっては、自らの手で歌集を編むことも、或いはこれが最後になるかも知れないと思うと、いささか心寂しいものがある」と述べられ、題名「対偶」の所以も簡潔に記されてある。正に藤村省三氏歌業熟成の集というべきであろう。

朝露に濡れたる足をともにひき悲しみ
わかつごとくに歩む
口きかぬ日もありながら対偶のあるとふ事の老いて有難し
五十年連れ添ひて何もかも知ると互みに思ふ程には知らず
暖かき落葉の径にともなへり用なくなりて過ぎゆき淡し
繰返し言はねば返事かへらざる対偶の耳かたみに嘆く
辛抱をながく続けしなからひと或は妻も思ひて居らむ
南無阿弥陀十万億土夕茜妻より先にお召しくだされ

抄出の七首をふくめ、美智子夫人を、又はご夫婦の事を詠まれた歌は約九十首ある。何れもこまやかな情愛を内に秘められた練度高い詠唱である。

病む妻を憐みゐしが午後となりひとり来りて吾は曽孫を抱く
曽孫去にて正月過ぎてわがめぐり再び笑なき真冬なり
孫曽孫生るるたびに喜べどわが姓を継ぐ一人のあらず
「にんげんっていいな」と唄ひゐる幼いつの日人の悲しみ知るや

孫、曽孫を詠まれた歌五十首中、見出曽孫㈠㈡㈢㈣より一首づつを抄出。然し好好爺の手放しの溺愛歌ではない。人間の悲哀に裏付けされた、穢れ知らぬものへの慈しみの心、祷りの歌である。

そこにのみ日の差す窪に寄りてゆく心通ひて落葉とわれと
杖に手を置きて憩へるめぐりには音して落葉音なく落葉
おのづから土にしづまりたる落葉時雨のまへの光が寒し
おのづから音あるときと無きときと落葉の上の落葉果なし

氏は努めて散歩をされる。その散歩の径の裏山の落葉の季節を最も好まれて、前著「落葉の節」に秀作を披露されたがやはり、氏の歌に表現される裏山の落葉の季節の寂寥感には、深く美しい詩の世界がある。

雲よ風よ光よ父のふるさとを見放くる山にみ霊を呼ばむ
生まれたる川に還りて死ぬ鮭を思ふにも吾に故郷のなし
阿りて人のしりへにつかざりき貧しく老いていまに貫く
ソフトボールドッヂボールと遊ばせて評価は何に拠る体育か
老人福祉は枯木に水をやる如しなど言はれつつ未だに死ねず

歌話会、新樹会、柏野短歌会共催による「対偶勉強会」の席で、氏は作歌信条として「気儘に詠む」と述べられた。気儘は勝手放題ではない。読者に阿らぬ自由な自己真実の表白である。右に抄出の歌群には、その信条に即してよまれた氏の面目躍如たるものがあるであろう。

一年のことは忘れて早く寝む十指祷りのかたちに組みて
右向きに臥りて邪魔になる右手伸せば肩を抱くに似たり
三箇日おだしく過ぎて四日雨五日風吹くわが誕生日

感銘歌を挙げれば限がなく、その張りつめた声韻には息づかいの乱れも感じられない。という事は、氏の歌業の息の長さを予測するものと言えよう。ますますのご健詠と後進への御指導を願って、歌集「対偶」の御紹介とさせていただく。

## 「新樹第二集」各人一首選

藤原すみ

法隆寺回らす塀の石積に左ききなる鑿跡をみき

在賀彦一

左利の鑿跡を見のがさなかった作者の目の確さに驚きと共にロマンを感じます。

迎へたる嫁を家族と知らぬ犬旬日すぎてなほ吠えつづく

安東はつ子

新しい家族への犬の対応ぶりがほほえましく捉えられています。

明けきらぬ牛舎に来り灯点せば仔牛らすでに起きて餌を待つ

伊東まさ子

朝の餌を待つ仔牛の生々とした様子が描写されて味わい深い御歌です。

夫と吾いづれが残り冬の夜をかく過すやと雪の音きく

小倉法子

遠くない未来に向けられたしみじみとした思いが伝わって来ます。

夫の眠る印度洋遠く偲びつつ足摺岬立ち去りがたし

小倉松子

足摺岬立ち去りがたしに作者の気持が凝縮されて心の通った一首です。

細長く車道に伸びしわが影が走る車にひかれて歩く

太田貞子

よく体験する光景を歌に捉えた作者の心象の描写とも受取れます。

露に濡るる屋根乾くまで仕事にはならぬと茶房に入りて刻待つ

北隆治

屋根の乾くのを待つ茶房の一時を早速歌材にしてうまいと思います。

大根の種子蒔かずして来しことを病院の長き夜に思へり　日下ふさゑ

入院していても家事が念頭を離れない主婦の心が伝わって来ます。

しばらくはビルの九階夕焼けて別離の如く暗みゆきたり　倉田美代子

夕暮れの別離の様な物悲しい詩情を歌いあげてロマンがあると思います。

同居する子らのペースに過ぎてゆく時を刻みて光る秒針　栗山　節子

同居する子らとの心の屈折が光る秒針にさりげなく言ってあって心に残ります。

口あけて暑さにたふる鶏に夏の夕陽の沈むがおそし　篠本　久子

熱気のこもった暑い鶏舎の鶏がよく描写されていて気持のある一首です。

足萎の失意の日々の手作りの人形はみな淋しき顔す　瀧元　喜子

自分の宿痾をあきらめながら心の底に漂ふ哀感が汲み取られて秀逸です。

大声で昼餉に呼べば厩にて夫より先に牛がふり向く　中田　博子

作者の声が聞える様です、目は的確に対象を見ていて温いものを感じます。

集ひたる友らそれぞれ戦ひに一生狂はせし悲しみを持つ　野中　勝子

戦争を経験した女の悲しみが捉えられていて深い共感を覚えます。

子等と住む希ひの淡し青葉影うつす硝子戸ひたすら磨く　冨和かず子

心静かな作者の心境が硝子戸に映って、おだやかな抒情を湛えています。

ソーメンを分けて十年竹箸の細りし位置を今朝も持ち居り　森　つな

竹箸を持つ位置のちびさえも見落さずに味わい深い歌にされてうまいと思います。

ヒューム管四五本積まれて何事か始まる気配枯野にみつる　森本萬千子

枯野にみちている一種の緊張感が読む側にも伝わって来てうまいと思います。

夫の呆け笑へずとひとり思ひ居り切手貼らざりし手紙戻り来　矢羽野たづ

年を取るとよくある事を早速歌にされて着眼点の面白い歌になっています。

洗ひても匂ひ残れる作業着をまとひて今日も素麺作る　安政　嘉子

素麺を作る生活が匂ひによって表現されて味わい深い一首と思います。

塀越しに雨待つ言葉交しつつ水やる夫と隣の主　山田百合枝

夫と隣の主の交す言葉の中にほのぼのとしたものを感じます。

語りかくる思ひに鳴らす鈴のおと逝きたる母の聞きていまさむ山本　千代

亡き母への作者の気持が読む者にしみじみと伝って来ます。

客の絶えし店を通りて吹き抜くる風が硝子ののれんを鳴らす　渡辺ちよの

客足の絶えた店のひとときガラスののれんが風に鳴る静かな情景が感じられます。

## 短歌ひとすじに

栗山　節子

大谷吉次さんの一周忌を前に御家族の熱望と、永年に亘り厳しく又温かく御指導された藤村省三先生の御努力により、遺歌集「夕茜」が上梓されたことは歌友の一人として喜びに堪えません。

大谷さんの繊細な感受性と歌にかける情熱と努力は、帰らぬ人となられた今きらきらと輝く歌集となって世に出ました。

妻も子も母も働きゐる夏をいたく哀しくわれは病み臥す

この一首は大谷さんの葬儀の席に墨くろぐろと掲げられていた遺詠です。生まれつきの病弱と事故による足のハンデーを背負い、晩年は咳と痰に苛まれながらの闘病の日々でした。この歌には作者の哀しさ、悔しさ、家族へのいたわりが凝縮されており、その心が「夕茜」の源流となり沁々と哀感漂う歌集となりました。

藤村先生の序に「大谷君の作歌に注ぐ努力は十年余りにして見事に結実し実力を認められて同人に推薦されようとした矢先と」とあります。大谷さんの死は余りにも早く惜しまれてなりません。鑑賞力の乏しい私は一首でも多くここに紹介して歌評にかえたいと思います。

「命保てるもの」より

暮るるまでに刈り終りたき畦の草はや露もちて袖口濡らす

妻はよく働きわれは長病みて罪をかさぬるごとく臥しをり

老いゆけば老の希望を胸にしてひろごり燃ゆる茜にむかふ

習性に身を隠さむとする獣闇に二つの金の目光る

「夕　茜」より

雪五寸なべてを隠しぬいさかひて並べし畑の境の石も

薄き胸包みて居りし服脱ぎて置けば畳の上に平たし

つつがなく一日終りぬ隣家も車帰りて門燈消ゆる

蒔きてゆく種麦厚し薄しと言ふ後より肥料撒きくる妻が

強かに頭打たれて立ちし杭今朝軟らかき雪の積れり

わが想ひ病はなるることのなし孫の雛を飾れるときも

遣り処なき腹立ちに踏む水溜り氷が割れぬ抵抗もなく

追ひ越しし乙女の長き脚見つつ老の歩みのおのづとはづむ

物体に過ぎぬ体の一部にか延ばしし腕がこきりと鳴りぬ

咳き込める我を見つむる九十二の母の悲しき眼に会ひにけり

やさしくはしてやらざりし妻老いて稲刈

り済みし昼を居眠る
何もかも我を離れてゆく思ひ野の枯草も向うになびく
注射のあと採血のあと皆消えて癒えたき願ひ花の季過ぐ
点滴のアンプル透きて輝ける青空見つつただに癒えたし
書読まぬ日日の続きて机の上の一輪挿しの卯の花の散る
咳出づることなく代田掻く夢にゴム長靴が足に重たし
頁を追ふにつれて死は紛れなく近づくのです。しかし歌は寂かに清明になります。これは病苦を克服する強い意志とやさしいご家族に看取られる安堵と感謝の日々であったのでしょうか。

## 各地短歌会　入選入賞作品

### ◇兵庫県春季短歌祭

（4月29日・神戸市立婦人会館）

・春季短歌祭実行委員会賞

酔さますふりして中座せし夫が牛舎にゆきて牛に餌をやる　伊東まさ子

・入　選

ブレーキを踏む畜産車の荷台よりよろめく牛の固き音する　中田　博子
モノレールの巨き支柱の建つ陰に物干す家の低く寄り合ふ　野中　勝子
ヒューム管四五本積まれ何事か始まる気配枯野に満つる　森本萬千子

### ◇第七回宍粟郡民短歌祭

（10月9日・センターいちのみや）・知事賞

スーパーのレジに並びて独り居の生活（くらし）見らるる思ひに立てり　冨和かず子

・県会議員賞

異質物拒むがごとく空缶を波は押しあげ押しあげて来ぬ　森　つな

・一宮町長賞

盲なる翁のまなこ注がれて手捌き確かに笊編まれゆく　田中　君枝

・一宮教育委員会賞

いじめっ子に謝られゐるクラス会七十年は彼にも過ぎて　名賀ときわ

・一宮文化協会賞

落日をかぎる砂丘の頂に祷るごとくに人影の佇つ　栗山　節子

・一宮農業協同組合賞

母山羊のはれる乳房に届かざる位置に繋がれて仔山羊草食む　新田　弘美

・宍粟郡歌人連盟賞

動くなと夫は言へども背をこがす灸の熱さに前へ這ひゆく　篠本　久子
歯切れよき但馬訛に話しつつ行商の媼鯖をぶつ切る　瀧元　善子
盆供養わが家に終りたる僧の衣を脱ぎて顔くつろがす　野中　勝子
サングラス外さず話する友にこころ通はぬ思ひに応ふ　森本萬千子

### ◇第三回国民文化祭ひょうご88

（10月29日・芦屋市ルナホール）

・入　選

石切りの疲れを言へる子に寄りて亡夫より広き肩を揉みやる　日下ふさゑ
競売をひとまづのがれたる家に犬も落ちつきて軒の日を浴ぶ　安東はつ子

### ◇兵庫県民短歌大会

（11月23日・稲美町中央体育館）

・兵庫県歌人クラブ賞

物言はぬことも安らぎの証とし老二人ゐて雨の音聞く　山田百合枝

・稲美町半どんの会賞

三十五年使ひ来りし製麺機手放すと一枚の紙に印押す　安政　嘉子

・入　選

いんげんを採る夕畑に仏心寺と常楽寺の鐘同時に韻く　日下ふさゑ
人骨と倶にありつつみづからの光を放つ副葬の玉（ぎょく）は　稲村　幸子
わが家に乙女子ありと語るがに赤きドレスの案山子立ちゐる　森本萬千子

### ◇西播磨短歌祭

（11月26日・西播磨文化会館）

・知　事　賞

警らする道に立寄る警官の親しく牛の面を撫でゆく　伊東まさ子

・県文化協会長賞

トロ箱を這ひ出る蛸が長靴の足に寄せられ競りにかけらぬ　田峰　定子

・西播磨県民局長賞

ゴルファーの打ちたる球を追ふカメラ芝生の果ての捩花捉ふ　安東はつ子

・西播磨文化会館長賞

弟の遺しゆきたる作文の中に私の嫁入りがある　渡辺ちよの

・西播磨文化連絡協議会長賞

梅雨明けを喜び塗装に出で来しが焼けしトタンの屋根にたじろぐ　北　隆治

・入　選

製麺機運び出されし作業場に残る時計が時を刻めり　安政　嘉子
山深き放牧場の一軒家洗濯ものを竿高く干す　山本　千代
充たされぬ吾が独り居の休日を当てなく歩くスーパーに来て　冨和かず子
幼な児の口の形に齧られし赤き林檎は唄ふがに見ゆ　森本萬千子
柔らかき角生えそむる鹿もゐて秋の彼岸の近き飛火野　栗山　節子
経営者死にて一年夏草の鶏舎の跡に鶏糞にほふ　篠本　久子

# 俳句

## 第六回俳句大会（宍粟郡一円）入賞・入選作品

八幡神社楠風閣にて

（山崎町長賞）

菊花展出て野路菊の可憐なる　山崎　下村　君子

（山崎議会議長賞）

子に疲れ子に生き妻の木の葉髪　一宮　中村　菁莪

（山崎文化連盟会長賞）

佳き話するに相応し菊日和　山崎　永井とみ代

（山崎教育委員会賞）

腹の子と話す一日毛糸編む　波賀　井口浪漫子

（朝日新聞社賞）

傘寿越す夫に褒賞菊日和　山崎　秦　千里

（奨励賞）

薄木満寿恵（山崎）山田東軒（山崎）芦田八重（山崎）伊野左智江（山崎）高野志都代（山崎）原田駆雲（山崎）石野光栄（山崎）福田泊水（山崎）藤井七代（山崎）原田小次郎（山崎）

（入　選）

松本澄子（千種）大上みよ子（山崎）木村一子（山崎）大谷延子（山崎）小紫いく（山脈）高野南嶺（山崎）田中良子（山崎）友沢恭子（山崎）田住フサ子（波賀）春名章子（千種）秋久光子（山崎）尾崎鈴子（山崎）堂場かつの（千種）松本無縫塔（千種）山田磯女（山崎）

---

## 城下町いずしを尋ねて

昭和六十三年四月十日

山崎俳句協会青嶺句会　芦田八重

二十名車中は賑か。いつか山陰路へ、やはり山陰は寒いのか、遠山の山襞に雪が白く残っていた。竹田城跡、生野義拳の平野次郎の話をしたり。

出石の町は静かなたたずまい、そば処とあって、そばのお店が多い。そして、出石焼の瀬戸物店も多い。おりゆう灯篭というのがあった。江戸時代の船着場で当時は出石川が流れ交通の要所で船の往来がはげしく、栄えたところらしかった。

辰鼓櫓という櫓が見えだした。藩主が登城される辰の刻に太鼓を打って家臣に登城を知らせたらしく当時が偲ばれた。谷山川という川に有子橋という橋がかゝり、朱色の鳥居が山道に沿うて沢山並んでいた。平坦な処に茶店があり、その広場で、そば喰い競争が始ろうとしていた。始りの太鼓が鳴りだした。

私達は次の目的地宗鏡寺（沢庵寺）へ向う。山桜は満開だが、他は未だ蕾だった。寺の正面の屋根に、葵の紋が金色に輝いていた。

「夢見の鐘」の話を聞き、一つずつ鐘を撞く。沢庵が造られたという鶴亀の名苑を見せていただく。和尚お手植の佗助が咲いていた。佗助は沢山咲いていて、淋しい花だった。藩主の墓は戒名の長い墓。私達の会場は「松福」といって倉のようなところ、表に「青嶺句会」と張紙がしてあった。

佗助や戒名長き国主の碑　とみ代
落椿城主の墓は石とびら　君　子
春愁や首傾けて水子仏　小次郎
但馬路やまだととのわず花の径千　里
一つずつ鐘つき春を惜みけり　八　重
旅麗ら神慮の晴を賜わりし　疎　人
山門に講話の訓示辛夷咲く　延　子
春爛漫そば喰ひ大会そば處　光　栄
車窓今残雪の嶺掲げたり　千　代
案内書地上に拡げ春うらら　泊　水
春愁や古りし暖簾のそば処　光　子
陽炎のもえ城跡の白き壁　良　子
城跡の石垣が知る花の宴　千恵子
城濠の花影写し碧く澄む　愛　子
数咲いて辛夷の花は下むかず　薫　風
灯籠や城跡散策桜花祭　い　し
禪寺の扁額古りぬ春うらら　駆　雲
今朝の春足で楽しむ詩の旅　ひろ子
辰鼓櫓見上げる頬に春の風　南　嶺
出石焼を見に行く。絵を入れる人、ロクロを廻す人、流れ作業で美しい物に変ってゆく。いずし焼は白磁だ。

お天気に恵まれ楽しい旅だった。雪嶺の見える途を後にし、一路帰途に着く。

---

## こぶしの里を訪ねて

小　紫　いく

私ども山崎俳句協会の山脈俳句部会は和田疎人先生を軸として、句友一同は眼に見えない夢を、ロマンに追い続け何十回目かの吟行が昨年四月十三日に行われた。

会場は、岡山県と兵庫県の県境のこぶしの里、ここには数回訪れている不肖私が案内役をつとめさせて頂いたが、午前十時頃こぶしの里山荘の差し廻しの車で山崎出発。

風もなく一片の雲もなく紺碧の天、まさに吟行日和。

途中志引峠の頂上で小休止…夕べの雨で洗われた緑の山々、萌え出ずる大地、声出せば谺が返る静さが皆の詩心誘ふ。

鶯や兵庫岡山鳴き移り　疎　人
石投げて峪の深さや山笑ふ　薫　風
杉木立出て風光る丘に立つ　静　山
春兆す嶺々連りて笹鳴す　し　づ
山鶯谺かえして空青む　恵
ささ鳴きもまぢりて鶯声競う　鈴　子
県境を下る峠や竹の春　栄　女
花冷の峠を越えてゆく他郷　い　く

車は峠の絶景を後に岡山県へと下り東粟

倉村の村道を藁家へと向ふ。
邑のどか道を塞ぎて肥車　疎　人
花冷の藁家明治の貌があり　い　く
こゝの藁家は県の重要文化財に指定されてゐる家柄。ここでそれぞれに作句。
やがて目的地こぶしの里山荘につき、一同用意された部屋で寛ぎ、昼食後〆切の時間まで句作に広い庭内に出てゆく。
雲一朶欲し底抜けの五月空　疎　人
春うらら峰々繋ぐ飛行雲　薫　風
陽をあつめ虻をあつめてこぶし咲く　柏　人
ブランコに寄りて思索や春の風　恵
春あらしせせらぐ渓の水乏し　マサ子
青空へ芽吹の木々の開たく地　栄　女
土筆長け嶺々連りて笹鳴す　し　づ
散々と句友の影あり土筆摘む　鈴　子
以上十時からの吟行句会も、小人数ではあったが、無事に、和やかに終り、それぞれにほのぼのとした想を胸にこの瀟洒な山荘に別れを告げ、一同次の吟行を愉しみにして帰途についた。

## 山崎俳句協会雑詠

「青嶺集」

退職の七曜遠し新茶摘む　芦田八重
初蛍ふと口ずさむ童唄　秋久光子
闇の田に関の声ほど蛙鳴く　石野光栄
紙魚走る亡姉の医学書あめ色に大谷延子
梅園の中の一戸の俄茶屋　高野南嶺
春蘭の筆の穂に似し花芽かな　高野薫風
柿むきて硬き母の手偲ぶ宵　坂本知佐
大花火終りて空の星戻る　下村君子
古稀過も身綺麗に老ゆ涼しさよ杉本いし
誤ちを素直にわびて爽やかに　菅原郁代
凛と咲く梅一輪に支えられ　田中良子
一人居に気まま土鍋の七日粥　友沢恭子
化物の如き梅雨茸足蹴にす　中野秋藻
万歩計今日は遠出や梅に寄る永井とみ代
薪より新芽吹き出し梅雨長し　中瀬公三
墓守のごとく一樹に寒鴉　原田魚梯
人形の眦裂けて夜の冴ゆる　原田小次郎
闘病の母に小さき切り雑煮　原田駆雲
雪解水山葵田の沢さざめかし　秦　千里
蜩や夕餉の祈りつつましく　春名寿女
母在す故郷と同じ虫の声　原田百合
春灯雑誌の表紙みな女　福田泊水
砂の粒ほどの種にもひそむもの藤家千代
過疎の村暮れ田蛙の夜となりぬ深川春雄
御手洗の柄杓が繋ぐ去年今年前野千恵子
下り立ちて鴉遊ぶも雪解川　村元優子
窓の露遂に一気に馳け降る　山田東軒
祝ぎごとも悲しみも知る菊の面山田磯女
寄せ書の硯海春の灯を映し　和田疎人

「山脈集」

ねぎ坊主楽譜のごとく並び居り伊藤紫霞
にぎわいし海も白波燕去ぬ　尾崎鈴子
秋しぐれ淋しと言いし夫遠く大上みよ子
露深き花野に小犬はしゃぎて　大友一虎
秋めくや無住の家の白木槿　木村一子
流灯の百ありて尚海昏く　高野志都代
花衣此の身を縛す紐の数　小柴いく
枯芦や一水激ち川に入る　小畑柏人
一点の紅見ゆ鮎の油鰭　高野薫風
赤き実は小人の林檎蔵柑子　田中　恵
大根一本引いて事足る一人の餉牲川信子
僧堂のすだれをくぐり迷ひ蝶　野村静山
刈田跡子等の遊びの恣いまま姫野マサ子
行く秋を惜む雨情の詩碑に倚り本條栄女
大向日葵王者のごとく庭に立つ宮馬幸子
小春日の家を守り居り媼と犬　山野源子
鏡にて陛下見たまう後の月　吉岡　巌
花野尽き火口え溶岩の道嶮し　和田疎人

「さわらび集」

日溜りの山肌匂ふ歸り花　薄木満寿恵
庭若葉囁くさまに風のあり　川崎栄子
外遊の子を思う夜や銀河濃し　小林紫生
リラの芽のやゝ色づきて旅誘ふ庄　昌子
花野ゆく語らふ花の数ふえて壺阪加代子
望の月山門の龍飛び立つか　藤井七代
佳きことの想出に花重りて　本條淑子
寄する波汀に春を運ぶかに　山中正子
星月夜火星ひときわ燃ゆるかに山岸園子
枯れ果てて芭蕉は雨の音立てず和田疎人

## 俳句短冊の展覧

山崎俳句協会

山崎俳句協会では文化会館表ホールに於いて八月二日～十五日まで会員自作の句を揮毫した短冊を展覧した。幸いに俳句愛好者、多数の文化人の鑑賞を得た。
遠蛙こころ対話の外にあり　芦田八重
青嵐札所の朱印すぐ乾き　石野光栄
爪赤き仔かにはしりぬ浜豌豆高野志都代
桜貝旅の記憶の砂こぼす　小柴いく
会二つ終えて茶房に日の永き　小畑柏人
数咲いてこぶしの花は下向かず高野薫風
銀河濃し夜灌ぎ終えて明日は旅下村君子
春愁や木隅の静の眼は一途　田中　恵
熱の子の枕辺に置く蛍かご　永井とみ代
油虫叩くに長けて不肖の子　原田小次郎
銀漢や我が憂き事の小さけれ　福田泊水
わたつみの碑文も暗き木下闇　山田東軒
夕雲の炎のごとし旱空　和田疎人
其他秋久光子、伊藤紫霞、尾崎鈴子、大谷延子、高野南嶺、杉本いし、田中良子、友沢恭子、牲川信子、野村静山、秦千里、春名寿女、藤家千代、前野千恵子、深川春雄、山野源子、山田磯女が出品

## 西播磨県民俳句祭（11月26日）に於て五十嵐播水先生外三名の選者により左の通り入選

東西に小さき胡坐宮相撲　秋久光子
画帖のみ携へて来し紅葉狩　高野南嶺
にぎはひし海も白波燕去ぬ　尾崎鈴子
蟲を聞くいつもこころにある一事　芦田八重
熟し柿労るやうにして受ける　山田東軒

# 山崎薪能

福王流
十一世 江崎 金治郎

十年前ふとした事で山崎八幡神社の静寂な能舞台を見た折、今は亡き父とこの様な所で能が出来たら山崎文化の発展にも又能を身近で見られる良い機会にもなると思い、山中つね様に御相談申し上げたところ陽一先生も心よく御賛同下さり、壺阪様、藤多先生はじめ色々な方の御陰で組織づくりをして下さいました。第一回目は不慣れな事も有り多くの方々に御迷惑をおかけしましたが、シテ方故上田照也師、仕手方故大倉長十郎師に依頼した所、御二人共心より御協力下さいました。そして亡き父とで第一回目を無事終了致しました。「いみ火起こしの儀」というのは本来人目を避けて行う儀式なのに故根岸宮司に無理を申して舞台上でして戴きました。その時のエピソードにその儀式に使う杉の葉が前日の雨で多少湿っていた為に木と木をこすり合せたらすぐ点火出来るものが仲々点火しなくて困ったとか申されていました。御料理の方も何人分用意しようかとか色々有りました。皆様第一回目の時は天候が気になり何度も夜中目がさめたとか申しておられました。しかしその当日天候に恵まれましたが寒くて寒くて困ったのも思い出の一部として印象に残っております。特に第三回目の時でしたか、台風の真中に遇い御関係者と相談し山崎中学の体育館で行いました。急造の舞台とは思えない立派な舞台でした。第五回目を迎えるに当り記念会にという事に成り観世家元に来て戴きました。皆様の御力で橋懸りも再建され観世御家元も「立派なものが出来ましたネ」と感心されていたのも思い出の一事です。能翁、観世元正、千歳観世清和、狂言茂山千五郎どれを取られても超一流の方々でした。今は亡き上田照也師、大倉長十郎師、江崎正左衛門、又宍粟郡の故御先輩の皆々様に感謝すると共に山崎八幡神社薪能をここまでにして下さった御関係各位の皆様に厚く御礼申し上げます。又特に山崎薪能にとって忘れられない方山中つね様、現在病床についておられますが一日も早い御快復を願っております。又第一回目から御協賛を戴き「薪能の合間に一服を」と御協力して下さいました山崎茶華道協会の皆々様にも厚く御礼申し上げます。

# ミニエッセー

藤村 清一

◆…エレベーター…ローマへ旅行したときのこと。スペイン広場にほど近いヨーロピアンスタイルのホテルに泊った。案内された部屋は三階。玄関ロビーからエレベーターに乗って上がった。大人が五人も乗れば一杯になるような小さくて古風なエレベーターで、動きもことのほか鈍かった。それでも馴れぬホテルでのこと、広い立派な階段を利用しようともせず、最初に乗って案内されたエレベーター専用で上がったり、下がったり。

帰国してから聞いた話だが、イタリアではエレベーターは故障するというのが常識。階の途中で止まったエレベーターの中で一、二時間、閉じこめられることなどしばしば。箱の中には「十二歳以下の子供を保護者の付き添いなしでは乗せてはならない」と掲示。子供がエレベーターに乗って遊んでいたりすれば、周囲の大人たちは黙ってはいないし、万一、事故でも起せば、親が罰せられるという。

そういえばエレベーターに、いつ乗っても一緒だったのは日本人ばかり。イタリアの人たちは階段を利用していた。「知らぬが仏なり」とは、よくいったもの。もしもエレベーターが故障していたら、どうなっていただろうと思うと背筋が冷たくなる。

◆…アレロパシー…週刊文春に連載中の上前淳一郎さんが書いた〝読むクスリ〟のなかで『植物に霊感あり』と題して「渋柿をリンゴのそばに置くと、渋味が抜けることをご存知だろうか。この不思議な現象は、植物のアレロパシー（他感作用）と呼ばれて、専門家の間でも興味ある研究テーマになってきている。人と人の間で霊感が通じるのがテレパシー。それが植物どうしの間で起きるのがアレロパシーだ。このアレロパシーの〝霊媒〟の役割をはたしているのは、じつはエチレン。そのエチレンには植物を開花させ、果実を成熟させる作用があり…」など、と記載してあった。

さっそくポリ袋の中に渋柿五個とリンゴ二個を丸ごと入れたものと、渋柿だけをダンボール箱に並べたものの二組をこしらえ、そのなりゆきを試してみた。一週間後、調べてみるとリンゴを入れたものは、すっかり成熟し、皮の表面は艶があり、おいしそうだった。一方、渋柿だけのものは、まだ十分に熟しておらず、皮にカビが付いたものさえあって、食べる気がしなかった。この結果からみて「アレロパシーは記載の通り」と納得した。

# 宍澤御陣屋堀之内
# 絵図看板の建設

山崎郷土研究会史跡部

山崎郷土研究会の多年に亘る山崎町内史蹟の顕彰等郷土史研究に対して昭和六十三年十一月三日山崎町より文化功労賞をいただき有難うございました。

町当局のご理解を得て山崎町と郷土研究会の両者によって史跡部の事業として標記の看板を建設いたしました。建設される場所は山崎小学校「紙屋門」の右手昔の内堀の上になっており、次の説明文を付しております。

『この辺一帯が山崎城であり別名を宍粟城と言っていました。今から三百七十余年前（元和元年六月）徳川家康の孫に当る松平石見守輝澄が宍粟郡三万八千石をもらって山崎の地に城を築きました。

寛永八年、赤穂城主であった弟の政綱の死去により佐用郡と赤穂郡の内から三万石を加えられて六万八千石となりました。

寛永十五年、お家騒動により同十七年領地没収となりましたので、代って岸和田城より松平周防守康映が城主となり宍粟郡佐用郡の内の五万石を賜わりました。この城は宍粟郡と佐用郡を相和した城であることから城の名を「宍佐和城」と名づけました。周防守は城地を整え城下の繁栄をはかりましたが、右城十二年余りで慶安二年島根県浜田に移りました。

その後には岡山県から池田光政の弟、松平備後守が城主となり宍粟郡の三万石を賜わりました。

寛文十一年、恒元が死去しその子豊前守政周が後を継ぎましたが、延宝五年、政周がなくなり養子の数馬がその後を継ぎました。延宝六年、幼君であった数馬も江戸で急逝したので家を嗣ぐ子がなく御家は断絶して領地は一たん幕府の領地となりました。

延宝七年、本多肥後守忠英が一万石の城主となりました。前の藩主松平数馬の城地に館を造りそれ以来ここを「宍澤城陣屋」と呼びました。

その後藩主九代が継続して明治維新となりました。明治五年、学制領布によりこの地に藁葺の旧山崎藩邸がそのまま学校になり、思斉小学校、篠陽小学校、篠陽尋常小学校、山崎尋常高等小学校、山崎国民学校と校名が変更になり現在の山崎小学校になりました。

この左の門は山崎藩陣屋門（紙屋門）で町指定文化財となっております。左右の土塀と石垣も当時のものが遺っております。』

# 縁あって

昭和会
塚田清一

昭和会は、幼い時から手をつなぎあって大きくなった仲間が、いよいよ郷里に住む様になりその環境をより楽しいものにする為に会い集い、お互いに連携してゆく為に昭和三十一年に組織したものです。特定の目的をもったり、高い理想にもえたものでなく気楽な仲間の集いです。その後、郷里に帰ってきた友人達も誘い合わせ現在に至っています。友達はすべてに勝る珠玉です。友に会い、友と語る、唯それだけで、心が暖まり明日への希望と勇気が湧きます。私達はこの会を大切に育てていきたいと思います。

以上が私達の会のプロフィールです。現在の会員数は37名、年代分布は何故か大正生れが2名、昭和一桁が29名、二桁が6名です。又職業も医師11名、企業経営者及び役員13名、商店主9名、教育、行政関係3名、住職1名と、多士済々にわたっています。それ故に情報交換もきわめて有意義に機能し、何がなくても、唯、会い語らうだけで、本当に楽しい集いがもてるとてもすばらしい会です。

私が入会させて頂いたのは昭和四十三年、29才の時でした。たまたま近所に先輩会員が数名おられましたご縁でお誘い頂きました。当時初めたばかりのゴルフや、大学とサラリーマン生活で何とかものになったのがこれだけというマージャン等の仲間に入れて頂ければと思い、きわめて短絡的な考えで入会の決意をしたと記憶しております。以来二十年の歳月が流れ会友の諸兄に色々と御指導を頂き、ほんの遊び心での入会にもかかわらず、知らず知らずのうちに種々の体験を重ね、見聞を広める事が出来、随分と自分を高める事が出来た様に思われます。

私達の話が長くなりましたが、私達は日頃、様々な人間関係の中で生きております。そしてそうした人とのつながりはとかく個人的意志で出来たものと考えがちです。だからそれらのつながりは自分一人の考えで、いつでも断てるかの様に思っている一面があります。しかし、〝袖ふり合うも他生の縁〟という深い力が働いている様に思えます。

お互いに縁あって、今の世に生まれてきました。そして縁あって色々の人とのつながりをもっています。〝縁あって〟何か古めかしい言葉の様ですが、そこには又一つの味わいがひそんでいる様に思います。良縁多からん事を期して、人とのつながりを大切にしていきたいと考えます。

# 「漢詩と日本人の心」
# 「レベルの高い山崎の詩吟」

山崎詩舞道連盟会長　小川　登

中国の最も古い詩集は三千年前、周の時代に作られた「詩経」であります。面白いのは此の詩経には諷諭の詩が沢山あると言うことです。為政者に反省を求め、正しい政治に戻そうと言う、一種の興論が詩に托されているのです。古代の中国人は歌と言うものの力、歌の徳は、人をも神をも動かす、たとえば風が漂って行って、草木をなびかすように、何者もこれを遮ることは出来ないものと信じていたようです。民衆の英智と言うべきか、現在の民主主義の理念が三千年の昔、既に認識されていたと言うことです。詩は士の心を表したものと言われる所以もこの辺にあるのではないでしょうか。

吾が国で最も古い漢詩は天智天皇の御長子、大友の皇子の作られた「待宴」であると申されています。

皇明光日月　帝徳載天地
三才竝泰昌　萬国表臣義

天皇の御威光と国家の平安、万国との友好親善を称えられた詩であります。将に現代にも通じる詩であると申しても良いのではないでしょうか、爾来、嵯峨天皇、菅原道真、弘法大師、上杉謙作、伊達政宗、山崎闇斎、山鹿素行、徳川斉昭、西郷隆盛、木戸孝充、乃木希典、広瀬武夫等々、日本の思想と文化を代表し、日本の正義を実践した人々が数々の名賦、秀詩を遺して来られたのであります　漢詩こそは日本精神の真髄を謳ったものであり、日本人の悲憤慷慨の歴史をつづったものと申せましょう。特に日本の近代化、明治維新の精神的原動力となった、国学の創始者、山崎闇斎先生は漢詩の名手でもありました。有名な「有感」の外に、当時としては珍しく庶民の生活を詩った名作が多く遺されています。山崎詩舞道連盟が闇斎神社奉賛吟詠大会を開催させて頂いたのも、大変重要な、山崎の里ならではの、歴史的、文化的意義があったと思うのです。

山崎詩舞道連盟、七百数十名の会員は、このような先哲の名賦を吟じ、時には現代の名詩にも興じ乍ら「礼と節」「誠の道」を信条として吟詠の練磨を志しているのであります。詩は士の心を表すと申されていますが、吟は士の心を音声に現し、舞は詩を形に表現したものと申せましょう。山崎詩舞道連盟は前述のような歴史的事実に基く為でありましょうか、幸いにも其のレベルは極めて高いのであります。即ち、日本全国の吟詠人口は百万人と申されていますが、会員数は全国平均の三倍に達しています。其の中には、全郵政吟詠大会で三回も全国優勝、クラウンレコード近畿大会で優勝された小田賀峰先生、賀堂流宗家杯、ヴォックスレコード全国大会合吟の部で優勝された森下賀励樹先生、兵庫県吟界の第一人者であり、賀堂流の至宝と言われている兵庫県の吟士権者矢野賀琮先生は、㈶日本吟剣詩舞全国大会にも兵庫県を代表して何回も出吟され、輝しい成績を納めておられます。賀堂流宍粟吟詠会竹沢賀鴨先生は格調のある吟風で多くの門弟を指導され、近畿本部の大会等で上位入賞者を出しておられます。女性では竹井紫苑先生が全国大会壮年の部に兵庫県を代表して出吟されております。合吟の部では竹井憂鳳、香山正鳳先生と共に近畿大会で優勝されており、紫州流名吟会山崎支部の名を高められたのであります。紫州流は会長が梅内紫蓉先生であるだけに、女性吟士の進出が目覚しいのですが、百名会員の中には其の名の如く男性の名吟士も多数おられます。摂楠流は恩師田口奨摂先生の下、三岡誠摂先生はじめ二十二名の指導者が、百八十余名会員の練成に励んでおられます。扇舞では冠翔流の片山冠恍先生、森下冠励先生、奥野冠萃先生、春名冠容先生が指導者として多くの門下生を育成しておられます。芸能祭、各地の吟詠大会、老人福祉大会其の他のボランティア活動に出演され、幽玄華麗な扇舞を披露して頂いています事は御高承の通りであります。

私達は先賢の遺された歴史的、文化的遺産を継承しつゝ、更に研鑽努力を重ね、自らの心身の練磨育成と、情操の向上を図るのは勿論、地域社会の文化の向上発展に聊かでも貢献させて頂きたいと念願致すものであります。大方の御叱声を乞う次第であります。

# 文化会館のピアノを弾いて

山崎文学会　町　悦子

「手にやさしいピアノやわ」黒鍵が黒壇の木地のままで、塗料が塗ってないのです。「指がすべる心配をしなくてもいいのよ、上手に弾けるかも」

「センサー内蔵?」とにかく弾き出した途端に、その曲にぴったりの音が響きはじめるのです。クレイダーマンの「渚のアデリーヌ」でも、バッハのシンフォニアでも、ショパンの「華麗なる円舞曲」でも。

「徒弟制度ってナニ?」コンピューターで作曲したり、音を出したりしている今の子供達は、優れた感性や深い洞察力を持った大人になったとき、昔の人々が作りあげたものの価値を今の私達よりももっとよく理解できる人間になると思います。

# さつき雑感

播磨さつき会

立花正太郎

国民作家といわれた吉川英治先生のことばに「この人生は旅である。その旅は片道切符の旅である。往きはあるが帰りはない。我々はこの旅において、さまざまな人と道中道連れになる。それらの人々と楽しくスムーズにやって行くには〝人生のパスポート〟が大切である。それがお辞儀とあいさつである」とある。

私はこの旅の中で、さつきとの出会いによって旅を楽しく心豊かに続けています。先生の云われるお辞儀とあいさつは欠くことはできないが私は「さつき」が立派にパスポートの役割を果していると信じています。私が実際にさつきを栽培しだしたのは昭和四十四年頃からで、中でも忘れることができないことがある。昭和五十一年に町立の精神薄弱者授産施設さつき園が誕生、初代園長として勤務中、県下の関係園長会に出席し、さつき園が、さつきの町で知られる山崎町立の施設であることを紹介したところ、休憩時に神戸市立のT園長から「さつき」について、いろいろ質問があり、これがきっかけでT園長と懇意になりました。T園長は私と同年輩で施設運営については大ベテラン。その後私はさつき園の運営全般に亘って数々のアドバイスを受けて初代園長としての重責を逃れることができました。これもさつきの町に生まれさつきを愛培していたお陰と終生忘れることが出来ません。T園長とは現在もさつきを通して親交が続いております。

昭和六十年に退職してから早くも四年の歳月が流れたが、さつきとの旅は続いている。さつきがパスポートの役割をしてくれる最高の場「さつきまつり」も今年は三十回になる。私には祭りを縁として老若男女の道連れが次々とできてうれしい。でも喜こんでばかりおれないことが……。私のさつき人生の旅における道連れの年令のこと、若い人も多いがこれはいずれも山崎町の人ではない。十年後の「さつきまつり」のとき私は七十才を越すことになる。これも心身共に健康であってのことで、さつきの町山崎町のパスポート役をしている「さつきまつり」がどうなるのか心痛むものを覚えます。後継者不足の解決の案として私は常々「さつきまつり」の展示品については町内外から公募し、大臣賞を復活し展示品の格の向上を図ることが急務ではないかと思います。最後に私はさつきとの出会いを忘れずに途中下車は絶対にしないさつきとの旅を終点まで続けることを……。

## 茶華道協会の歩み

北川智恵

私共が茶華道協会を結成いたしましてから約二十年が経過いたしました。それ以前は会員はすくないながら会はありましたが会則をつくったのが昭和四十四年一月でした。

現会員は三五〇名で各流の師匠とそれにつぐ子弟などで、会の目的であります次の目標に至ろうと今日までたゆまぬ精進をつづけてまいりました。

その目的とは、会員相互の親睦、茶華道の向上を通じ地域社会の浄化、文化の推進、ということで、事業としては、文化連盟への加入、年二回の町の行事に協賛、年末のチャリティー茶会などで時には研修旅行や講演会等もいたします。チャリティー茶会の収益は、今日まで町の福祉協議会に寄付してまいりました。

あるお茶会のあとでこんなことがございました。女の校長で有名な藤井久子先生が退職後、わが茶華道協会に復帰されましたが、昨年の茶会のあとで〝お茶会というものは大変なことなのですね。二日もかかって支度や当日の供応等に汗だくで老も若きも一心に立ち働いた揚句が、マイナス四千円でした〟と感心されるやら溜息やらでした。先生ははじめて会計をもって下さったからなのです。そう言われてみて、はじめて気がついたのですが、私達はチャリティー茶会は大っぴらに茶券を買ってもらっていますが、外の会の時は大方は私達が割当の茶券を知人や弟子たちに配って二席分五百円で買うのがならわしになっています、お茶会と言えば代々の師匠先生から受けついできた行事をひたすら守ってきまして労を労とも感じず、相手を敬い一期一会を大切にする心がおのづから培われているのです。甘いお菓子と緑のお茶、よりすぐった清らかな水と温い人の和が渾然と一致して一席の茶会が催されます。お道具もそれぞれ間に合うのを持ち出します。昔は武将たちが茶道を愛し戦場にまで持って行ったものです。きっと心の安らぎを得たものと想像されます。どうか皆様、特に男子の方々も、茶道に対しこの上とものご理解を頂きまして、一席の茶会の時はつとめてご入席頂きたいと思います。茶会の極みに山海野川の手料理をつくり一献差上げるお茶事の会というのもございます。冬の夜噺の茶事など楽しいものでございます。そして、各学校に茶を取り入れて頂きたいと思います。きっと、生徒たちが心のゆとりと和の精神で学業に励げむようになると思います。誌面の都合上意を尽しませんが十五才より今日まで茶に親しんだ者の手記でございます。

# 層の厚い山崎囲碁界

山崎囲碁同好会
高野　圭介

山崎の囲碁が、宍粟の碁が、最近とみに充実し顕著な足跡を残しております。団体戦で優勝二回、準優勝一回とすべて上位入賞と敵するものなしの境。

個人戦で北川泰三氏が西播名人戦でB級優勝し、私も兵庫県朝日十傑戦六位入賞の幸運に恵まれました。

うれしい話が更に続きます。長老尾崎正一氏が勲五等双光旭日章を授章されました。氏は常に対外試合にも長老として活躍されております。

ここに団対戦の様子をお知らせします。

**西はりま囲碁大会　準優勝**

1月24日　於県立西播磨文化会館

**選手**＝尾崎正一・高野圭介・片山愛弘・森陰明愛・北川泰三・山下松男・大塚英一・井原嗣治・小林克己・中尾諭・植田佳文・阿曽嘉信　以上12名

**参加チーム**＝姫路市飾磨区・網干区・竜野市・相生市・赤穂市・赤佐両郡・神飾両郡・太子町・新宮町・宍粟郡の10組

**緑の回廊囲碁大会　優勝**

5月22日　於三田市ホロンピア

**選手**＝小坂文雄・高野圭介・片山愛弘・松本明・山下松男・北川泰三・大塚英一・吉岡章雄・阿曽嘉信・井原嗣治・勝代茂・小林克己　以上12名

**参加チーム**＝三田市・三木市・小野市・加西市・西脇市・多紀郡・氷上郡・美加両郡・神飾両郡・宍佐両郡の10組

**はりま囲碁まつり支部対抗戦　優勝**

8月27日　於姫路山陽百貨店

**監督**＝高野圭介・**選手**＝片山愛弘・吉岡章雄・北川泰三　以上4名

**参加チーム**＝太子・西脇・荒川・加古川

**宍龍スーパー囲碁　チーム戦**

3月20日対局開始　翌年1月完

| ＜竜野チーム＞ | | ＜宍粟チーム＞ |
|---|---|---|
| 赤松　昭彦 | ×—○ | 北川　泰三 |
| 福本　伸男 | × | 〃 |
| 大脇由紀夫 | × | 〃 |
| 高田　充 | ○—× | 〃 |
| 〃 | ○—× | 中尾　諭 |
| 〃 | × | 山下　松男 |
| 〃 | ×—○ | 小坂　文男 |
| 熊渕　三郎 | × | 〃 |
| 西川　金五 | × | 〃 |
| 内海　耕 | ○—× | 〃 |
| 〃 | × | 山本　隆一 |
| 〃 | × | 太田　稔 |
| 〃 | ×—○ | 阿曽　嘉信 |
| 神　啓介 | × | 〃 |
| 前田　仁 | ○—× | 〃 |
| 〃 | × | 小林　克己 |
| 〃 | ×—○ | 森陰　明愛 |
| 久保　繁幸 | ○—× | 〃 |
| 〃 | ×—○ | 吉岡　章雄 |
| 有本　静也 | × | 〃 |
| 小西　良典 | × | 〃 |
| 石原　信頼 | ○—× | 〃 |
| 〃 | ×—○ | 片山　愛弘 |
| | (予定) | 青木　弘 |
| 藤井　正三 | (予定) | 高野　圭介 |

宍粟と竜野の15人づつの勝ち抜き戦です。燃えに燃えた対戦でした。

当方大活躍は北川・小坂・阿曽・吉岡の4選手で、中でも北川氏は三連勝の直後西はりま名人戦B級で優勝されております。

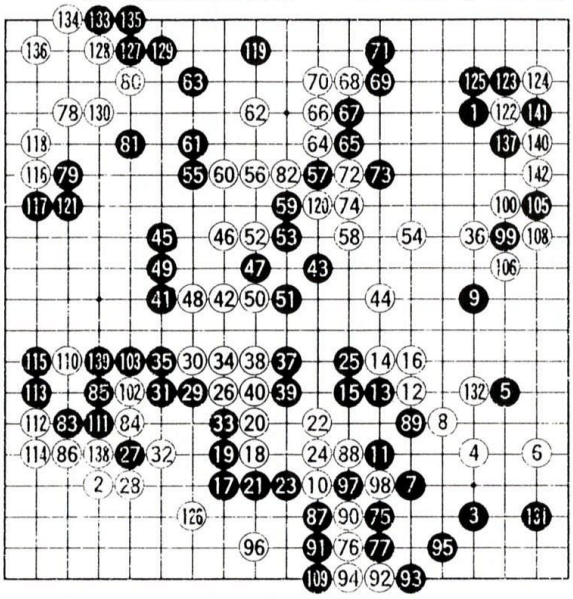
昨今、囲碁喫茶太陽にて、若手研修会が発足し、片山・吉岡・森陰・太田・山下・北川の各氏を中心に研鑽されており大なる成果が期待できます。

ほかに、守拙会、初心会、高下碁会、蔦沢碁会など各種同好の活躍が盛んです。

昭和63年5月1日

## 宍龍スーパー囲碁大会 第3戦

黒　大脇由紀夫(龍野)　　白　北川泰三(宍粟)



131 コウトル(97)　　142手まで
104 〃 (98)　　白　中押勝
107 〃 (97)

# さつき民踊グループ

大谷つるゑ

私共「さつき民踊グループ」は、民謡、民舞、三味線、愛好者の集まりで、本年始めて、文化連盟に加入させて戴き、まだ内容もくわしく分かっておりませんが、人と人とのふれあいの中に情緒豊かな生活文化の花を咲かせるべく、ふるさとの暮しを、豊かに唄い上げた民謡、民舞、三味線を習い、余暇をみて、ボランティアとして活動しております。ふり返って見ますのに私達は誠に目まぐるしく変容して行く激動期を生きてきました。青春時代を戦争の真ただ中で、戦後の混乱期は子育てに明け暮れ、戦後も終わり、漸く暮し向きも安定してきたと思った時は既に早人生の峠を越え、日ぐれに近く、身についた働きぐせも、この辺で見きりをつけて、余生を若き日に叶えられなかった踊りや三味線を習ってみたいと思い立ってより早足掛け十年目になりました。老化防止も頭を使う訓練だけでは片肺飛行とか、身体が弱ると、気力も衰えるということを念頭に稽古に励んでおります。

先生の差す手、引く手からは、つるの羽ばたく様や、川の流れが目の前に浮かぶように表現されますが私共が舞いますと、折角の格調高い祝儀舞も、勇壮な武将舞も、粋でいなせな江戸舞も、しっとりした京舞も、メリハリがなく、色気は、何処かへ置き忘れてしまい体操ともつかず、踊りともつかず、新曲に入ると、前の曲は、トコロテン式に、頭の中から押し出され、つぎの稽古日にはジャジャ漏りで、自分でもあきれ返りながら、仲間たちと覚えている個所を教えあい、漸く出来たと得意になって先生の前で踊ってみると、手足の運びが、まるっきり逆さで大笑いになります。楽しい稽古の二時間は、アッと言う間に過ぎ次の稽古日が待ち遠しく、仲間が集まる事だけでも楽しさが一層深まり、稽古日がなくなると、とても淋しい。習得した踊りも六十曲を越えた昨今では、置き忘れていた色気も出るようになり幾分か踊りらしくなってきて、あらゆる団体行事のアトラクションに年間十回程度は、ボランティアとして参加させて戴いております。

近いうちに皆さんに呼びかけて「山崎町民踊民舞合同発表会」として郷土の芸能文化の向上に資したいと希望しております。

# 現代の世相について

神山宗明

誰が茶の種を蒔いて下さり誰が此れがお茶の木だと見付けて下さったのでしょう。又、その茶の新芽を摘んでお抹茶にして下さった目的は何かと、ふと、私はそう思って驚きました。長い間茶道を修業させて頂きながらこの事を深く考えた事があっただろうかと思いました。そこで私はお教え頂いた茶道の歴史を振り返ってみました。

鎌倉時代に禅宗を我が国に伝えられた栄西様が中国の宗に留学された時、禅宗の教えと共に茶の種を持って帰国されました。そのお茶を寺院で薬用に供されました。それからだんだんと一般に普及致しました。室町時代に入りますと村田珠光様が足利義政公に仕えて佗茶を始められました。それが閑寂の中に数寄をこらす茶道の始まりになりました。やがて、武野紹鷗様が出られそのお弟子の千利休居士によって佗の茶道が大成されました。その後幾星霜、時代の変遷を経て今日に至りましたが、お茶席にお抹茶は和菓子と共に無くてはならぬものでございます。茶杓で一碗の中に二杓のお抹茶を入れ程良い加減に沸いた湯を柄杓八分目ほど注ぎ真心をいれて茶筅で点てます。ふっくらともり上ったやわらかな泡立ち、お抹茶の味わいを深める湯加減との調和、客をもてなす亭主の心が、この一碗に込められます。

〝茶の湯とは、ただ湯をわかし、茶をたててのむばかりなる、事と知るべし〟とおっしゃった千利休居士の道歌のお教えが身にしみます。一切の雑念をはらってひたすらに茶を点てその一碗の茶の中に和合する亭主と客との心、湯のたぎる音と共に時間と空間を超えて無に解放されるその一ときが本来の人間としての姿を見出させ新たな気持で、又、日々を送らせて頂く安らぎとなります。

今日私たちが此処に生かされている事の有難さ、一碗のお茶を頂き一層その想いの深まる時、多くの方々の恩愛に、只感謝あるのみでございます。

種という生命の不思議さ、私はやはり生命は神様がおつくりになったのだと思います。大自然をおつくりになって、そこへ生命の種を蒔かれたのだと思います。こう思いますと一碗のお茶には神佛のお恵みと多くの方々の限り無い恩愛が込められている事を知らされました。つきぬ感謝を捧げ一碗のお茶を点て、その心をこめた一服のお茶をお客様に差し上げる事こそ大切であると存じました。

〝一物中無尽蔵〟という禅宗のお教えもここに在ると存じます。　合掌

# ハーモニー雑感

藤井七代

二十余年前、町教委の下に混声合唱団が結成されました。以後団員の欠落という紆余曲折を経てママさんコーラスとなりそれを脱皮しつつ少数ながら女声合唱として安定し練習を続けている現在、ここ迄辿るに至った過程のうちで様々な人々に出遇い又御世話になって来た事に感謝する気持で一杯です。そもそも「歌う事が好き」「音のハーモニーの魅力」につかれて入会したのですが、いつの間にか合唱団を維持する役割を先達の片山吉恵姉よりバトンタッチされました。折しも県当局も生活文化を担うママさんコーラスに力を注ごうとされた時期でした。おかげで赤とんぼ音楽祭第一回の実行委員長を賜わり県知事来賓の下、竜野市民会館で華々しく開幕されたのもつい昨日の事の様です。西播磨文化会館にても伊藤親保先生提唱の「故郷の心をうたう合唱祭」として西播の各合唱団が集う事になりました。その波に乗り山崎町民合唱団もその位置を占めるに至りました。とうとう待ち望んだ山崎文化会館も建設され完成されました。時を得て郡内一円合唱する人々が集まり第九合唱団が結成されました。二百余名の団員と共に大阪音大オーケストラの生演奏により手づくりの大合唱が公演された事は皆様の御記憶にも新らしいことです。こんな事が可能だったとは、今もって信じられない思いが致します。以後町内で新しい合唱団が芽生えつつある事は嬉しい限りです。

古来、先進の仏教文化を導入された、聖徳太子の御言葉に「和を以て貴しとなす」とありますが、人は一人では生きられない。お互いが支えあい生かされる。これこそハーモニー、調和の心髄の証とも言われている。来年の春はきっとオケラやトトキを食べてみようと思う。それに痰の特効薬とか、近頃はお医者に行っても検査、検査が大変で、渡される薬の量も多く、時にはその薬が副作用を起しはしないかと心配でもある。もっと薬草のことを知っておかなくては……。

お話を聞きながら私はふとイギリスのノーベル学者ラッセルの言葉を想い出していました。「我々は大地の子である。我々の生活は大地の営みの一部であり、そこから栄養を吸収するのである…。」

秋の七草「クズ」の花にキラッとした輝きをみたのはその時でした。「井口先生、アレなんていう蝶ですか。」「ウラギンシジミの羽の裏が光っているのですよ。この蝶の幼虫はクズの若芽や花を食べているのです。」と教えていただいた。

植物同好会は毎月このような観察会をもっています。同好会と言えばすぐ植物採集会を連想しますが、この会は決してそうではありません。自然科学から民族学まで、盛りだくさんに知識を得ようとしています。私達は大地の子ですから、自然のあらゆる営みを理解することが大切で多くの面で自然との接触を保たなければなりません。そんなところにこの会の本旨があるように思います。

思われます。泉南岬町に熱心に文化活動をしている知人があり、この一連の話を伝えました。文化会館に立派なヴェーゼンドルファーのピアノが備えられた理由もつけ加えて……。彼女は「山崎は素晴らしい町ですね」と大仰に感嘆してくれました。山崎は城下町で様々な文化活動があり音楽に関していえば、指導者、技術者共々に有為なプレーンが揃っている事を今更ながら気付かせて頂きました。だからこそ、第九も成功したのでしょう様々な分野の方々がハーモニーしつつ、生活意識を高めて行くならば、吾が愛する山崎町も尚一層すばらしい町になるでしょう。又そうありたいものです。

# 九月の観察日誌から

植物同好会　古池末之

「山でうまいものオケラにトトキ、嫁にやるのもおしござる…。」〝ウモォー〟

植物同好会九月例会は一足先の秋色を求めて、蔦沢の大国牧場にやってきました。時ならぬ大勢の訪問に牛もびっくり、講師である内海先生のお話に相づちを打つ。まるでタイムトンネルにでも入ったようなのどかな観察会のひとときです。寸時お話は中断したものの続きます。

「トトキとはツリガネニンジンの古い呼び名で、若苗や葉をゆでてこまかくきざみ、ご飯にかけたり、あえ物や油いためにして食べると嫁にやるのも惜しいほどおいしいところからきています。それに夏の終り頃、根を掘り取り、乾燥してから煎じて飲むと痰を切るのに特効があります。こういった貴重な野菜や薬草が今忘れられようとしています……。」

今、私達が忘れてはならないもの、次代に語り継がなければならないものは何なのか。ふと考えさせられてしまう。飽食時代が過ぎ、これからは趣食の時代と

# 古典に思う

福山清一

昭和六十三年の「山崎町秋の催し」の中でその年の締めくくりの行事として、古典芸能を主として、皆さんに喜んでいただいている、秋の芸能祭（第十回）を天皇陛下のご不興の為に各地でひろがった自粛ムードの風潮に準じて会員の協議の上明年三月二一日に延期と決まりました。　芸能とは演劇、舞踊、音楽、歌謡、大衆演劇、民俗芸能など、総称でかなりあいまいな言葉であるが、今日では、見せたり聞かせたりすることによって、人を楽しませる、娯楽のための瞬間的な「芸」一般をさしていうらしい。

当地方で現在演じられているものは、謡曲、詩吟、日舞、箏曲、尺八、歌謡、民謡、新舞踊等で、その流れの歴史の期間は特定できないが、相当の永い間先人達の弛みない修練の積重ねが、今日まで引継がれたものであろうと推察できるのである。これらの芸能を演じている方々の現在はどうだろうか。謡曲をはじめとするあらゆる古典芸能を演じられている方々の年令層は、どの部門にしても相当高令化しているのが、実情で茶、華道はやゝ事情も異り女性の嗜みとして、若い年令層の方々が修練されているらしい。

古典部門の修練に意欲的な若い人達が少い各部門の現況では、当地方の古典芸術、芸能は衰微の一途を辿るのでないかと不安を感じるのは私だけの危惧であればいゝのだが。

何故若い人達に古典ものが関心をもたれないのだろうか、その一つは高学年指向であり、マスコミによる放映の影響も大きな要素でないだろうかと思われる。

こんな情勢を案じながらも一人でも、多くの方々に古典芸能を理解、協力してもらう為に延期している芸能祭を三月二十一日（春分の日）の開催にむけて、準備をすゝめております。昭和天皇の崩御の直後ではあるが又顧みれば平成年代えの飛躍につながる年であるとも考えたい。いずれにせよ古典芸能発展の為にも町民各位の絶大なる応援を期待し、芸能祭開催の折には沢山の方々のご観覧をお願いいたします。

# 健康の本質

老人大学　澤田友榮

〝余生とはいつから言うの葱坊主〟この句は私の友人の作である。余生とは老後に残された生活であり、進度の速やまった高齢化社会では年齢だけで余生を云々するのはどうかと思う。なにかきっかけ、定年退職、転居、別離等の要因があってこそ使いやすい言葉である。幸に友人は健康であり、精神的な若さと行動の知恵をもっているので、葱坊主でその本質を量（はか）しているように思われる……

**◎健康である三つの条件**

健康とは「精神的にも身体的にも社会的にも健全であること」と世界保健機構は定義づけている。健康ということを身体の面だけでとらえた時代は、人間の文化の歴史からみて初期のことであったと思う。精神的健康という考え方をしたのは随分のちのことであろう。その後、社会的にも健康であることを考えだしたのは第二次世界大戦のあとときく。

**◎適応性能力が健康の中心**

健康な状態とは、自分の健康をより増進できる体制である状態をさしていると考えられる。そして健康問題の中核をなすものは適応性の問題である。外界の変化—精神的、身体的変化、あるいは物理、化学的変化、社会的変化等に対応する能力をみずから増進できる体制がなければ健康といえないと思う。

**◎健康なからだはつくりあげるもの**

健康の本質を考える場合消極的な状態でなく、むしろ積極的な状態として考える必要がある。病気をしない状態が直ちに健康であるとはいえない。祖先や子孫に責任を果すためにも健康であることに積極的でなければならない。

**◎一時的現象と健康**

暑さ寒さ湿度等に対しても、食物や伝染病に対しても、それ等は一時の現象であると同時に永遠につながる健康上の要素となることを忘れてはならない。一時のことだからかまわないという考え方は、自分のからだを大切にするゆえんではない。

**◎社会的要因と健康**

健全な精神と健康なからだは両立しなければ、どちらも価値はない。そしてそれを地域社会のなかで両立させることが大切である。地域社会を無視して、その両立を考えることはできない。健康をまもる体制のなかで極めて大きな比重をしめるようになってきた。このような考え方は高令化社会の健康を考えるうえで最も緊要なことであろう。

# 根岸さん追悼

安井道夫

相当の年の差がありながら根岸さんと、さん付けにして呼ぶのも気がひけるが、先生などと言えば私にとっての根岸さんらしい印象が一挙にふっとんでしまう。

最初の個人的な出会いは、幸か不幸かやはり飲み屋であった。必ずひとり、それも夜中に近く、もう帰らなければと気にしはじめた頃になってやっと根岸さんの姿を見かけるようになる。こちらはお好み焼屋で、仲間と駄弁りながらビールを飲むのが精一杯の頃だから、そう早くから根岸さんの姿にお目にかかれるというのはどだい無理な話であった。

根岸さんにとっては女性と話すのが酒を飲むのと同意語になるほど、女と話し込むのが楽しみで、折角飲みに出るのに男同志が誘い合わせて行くなど不粋で愚の骨頂と思われたに違いない。

もちろん目的はそんな話すに値する女のいる店である。

あるときは長時間ねばり過ぎたといって不興をかったこともあっただろうし、閉めかけた店に遅くから押し入って、女から当て付けがましい嫌味を聞かされたことだって多かったと思われる。

ところが何事につけ自分の遣り方というものを何十年も続けるというのは、尋常なことではない。

そんな外観をみて、ひとは根岸さんの印象として、強引さとある種の豪放さをみていたことだろう。

私は同人誌『可不可』の縁で、晩年のわずかの間にすぎないが私の納得できる根岸さんの姿を垣間見ることができたと思っている。

とくに晩年の自分の死を見つめなければならない状態になられてからの、ほとんど劇的ともいえるほどの夫婦愛の姿を伺うにつけ、稀にみる幸福な生を生きたひとりの男の姿を思い浮べてしまうのである。

この八月私は一月ほどの旅に出た。その出発の二、三日前、原稿依頼をかねてお宮の石段で根岸さんの奥さんと話し込んだことがある。主人にとって書くということがどれほど大事なことか、生きることのアンテナのような役割で、それが適度の緊張を強いる場合は案外身体も確りしている、などとも聞いた。

私は年内はまだまだ大丈夫と勝手に決め込んでいたわけだが、別れ際の奥さんの姿がひどく寂しく旅行中も、そんな姿が気掛かりで、しきりに目の前にちらついていた。

あれはカイラス山巡礼の第一夜、ほとんど零下に冷え込んだテントの中で見た夢だろうか。まったく生物のかげもない荒涼たる砂地のなかに濃紺の湖面がある。波は重くきらきらと宝石のような光をはなっている。富士山がたの黒っぽい山が、その水面の上に小さく頭を出し、それが一列に並んでいるのである。

根岸さんは神宮の白衣に高下駄姿。まったく天狗のような出立ちで、器用に山から山へ渡り歩きながら私に声をかけられる。「ああ、こんなヤジロベエみたいなことが、ここへ来て初めて出来るんだから、ほんとに皮肉なもんだ」と。いまだに人間の生態が面白くて面白くてたまらぬといった口吻であった。

そういえば根岸さんの生前の眼に映った男たちの生態は、みんなヤジロベエみたいにいくら飲んで騒いでいても中心は崩れず、気がつけばうまい具合に消え失せてしまっている卑怯な男の光景ばかりであっただろう。

気遣いからガンでなかったと告げられた根岸さんが、「そらよかった」と奥さんを抱きしめ、声をあげて嬉し泣きされたという、その素直さは誰もが持ち合わせていることではない。

涙ぐましいほどの奥さんの献身があったのも確かであるが、ひとに知られることの少なかった根岸さんの情念の細やかさがあったからこそ、ヤジロベエたちには決して見えぬ死の風景を現出できたに違いないと思う。

原稿を書きおえ一安心されたある日、「わしは明日死ぬ。これがこの世の見おさめか」と言われたというが、それが本当に死の前日の出来事で、そこにはなにの悲哀も感じられないのである。

あっけらかんとして、奥さんに抱かれているような至福に満ちた静かな眠りであったと思う。

## 昭和六十三年度 子ども俳句大会入賞者一覧

一席　朝のしもしらさぎおりる田んぼ道　城下小六年　村上和歌子

二席　ひらひらと落葉の命消えていく　山崎小五年　山下　兼五

三席　紅葉の葉だれが絵の具をこぼしたの　神野小五年　船谷　梨恵

四席　えり立てて急ぐ学び路息白し　山崎小四年　白矢真由美

五席　北風となかよしほっぺまっかっか　城下小三年　鷲尾かずよ

六席　どんぐりがころりかくれる落葉かな　山崎小五年　谷口　敬子

七席　こいぬ座がきれいに光る冬の空　山崎小五年　長川まゆみ

八席　もみじって根っこに絵の具があるのかな　山崎小四年　辻元かおり

九席　見上げるとすぐに泣きそな冬の空　山崎小六年　阿曽　若菜

十席　おはようの声がきこえる霜の道　山崎小四年　谷口　勝俊

# 編集後記

編集長　荒木俊介

昨年末、体の不調を訴えられて、療養に専念されていた根岸前編集長が、薬石効なく、惜しまれつゝ永眠されました。こゝに深く哀悼の意を表する次第であります。

その後を受けて、不肖、私が、編集の責に当るようになりました。早速、既刊の「やまさき文化」七冊に更めて、目を通してみて、そこに、七年間という短かいけれども、素晴しい新たな歴史が、芽生え始めていることに気付くと同時に、その責任の重大さに身の引き締まる思いを致しました。宜しく、ご協力、ご指導の程をお願い申し上げます。

私は、かねがね、「やまさき文化」は、茶の間で、或は、憩いの場で、文芸を通じて、常に、町民の一人一人に親しまれる存在でなければならないし、又、これからも、そのように取り組んで行きたいと思っていますが、結果、企図したようになっていたか、どうか、案じています。忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

今回は、試みにコラム欄を設けて、山崎町ゆかりの方で、様々な優れた人生経験をもたれた人のエッセイを掲載することを企画し、山崎町出身の洋画家、松井叔生氏と山崎保健所長で医学博士の北岡修氏にお願いしたところ、心よくお引き受けいただき、玉稿をお寄せ下さいました。誌上をかりて、厚く御礼申し上げます。又、この度は、各界より、優れた原稿を数多くお寄せいただき、編集委員一同嬉しい悲鳴を上げています。

しかしながら、反面、本誌創刊以来既に、七年余の歳月が経ているにも拘わらず、尚、文芸面で新人の参加のないのが、淋しいだけでなく、気がかりに思われます。どうか、この様な文芸面に興味をお持ちの方は、教育委員会なり、山崎文学会へなり、どしどし、ご投稿していただき地域社会の文化活動にご参加下さい。

終りに当りまして、本号の編集にご努力いただいた教育委員会の職員の方々に深甚なる感謝の意を申し上げますと共に、この小誌に対しまして、読者の皆様方の限りないご声援をお願い致しまして、編集後記を終ります。

**◇やまさき文化編集委員**

浅田　耕三　　荒木　俊介
北川　泰子　　藤村　省三
藤村　清一　　安井　道夫
和田　秀男

（アイウエオ順）


OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器
イトーオフィスサービス株式会社
（旧社名　伊藤文具）
代表取締役　伊藤　勉
山崎町中央商店街　TEL(0790)62−0126

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司あらき
本　店：播州山崎町さつき通り　(電)62−0170
山田店：播州山崎町山田　(電)62−0160

## 飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社
TOBIISHI KIKAI SANGYO CO., LTD.
〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町山崎207-1 ☎(0790)62-1700

for happy days happy life

飛石機械 dept.
〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町山崎207-1 ☎(0790)62-1700

トビイシ住設 dept.
〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町東鹿沢10-1 ☎(0790)62-3610

CREATIVE dept.

飛石レンタリース山崎
〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町山崎207-1 ☎(0790)62-1700

飛石レンタリース姫路
〒670-01 兵庫県姫路市豊富町豊富甲2-16 ☎(0791)13-4022

---

✦最新型カラー現像機導入✦

カラープリント・スピード仕上げ

良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop

# コーエーカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 62-2089

---

# 山交タクシー

山崎神姫バス西隣

電話 0790－62－2166(代表)

---

幸せへの旅立ちに――。

# ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (0790) 62－0051

＊安全で快適な生活をお届けする＊

共同石油株式会社特約店

株式會社 本條商店

社長 本條 衛

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790)62－4321(代)

清酒 山陽盃

ふるさとのお酒 確かな品質

本醸造 しぼりたて 龍神

純米酒 きつき 一献

サンヨウハイ

山陽盃酒造 TEL (0790) 62－1010(代)

登録商標

老松

スエヒロ
オイマツ

兵庫県山崎町 老松酒造有限会社

おかげさまで40周年

＊ 地元にひろがる 心のふれあい ＊

西兵庫信用金庫

理事長 杉元清美